令和８年度　第１回富山県総合教育会議

日　時：令和８年 10 月 30 日（金）13:00～14:00
場　所：県庁４階大会議室

次　　第

１　開　　会

２　知事挨拶

３　議　　事
（１）「新時代とやまハイスクール　再構築ガイドライン」について
（２）「新時代とやまハイスクール　第１期設置方針」について

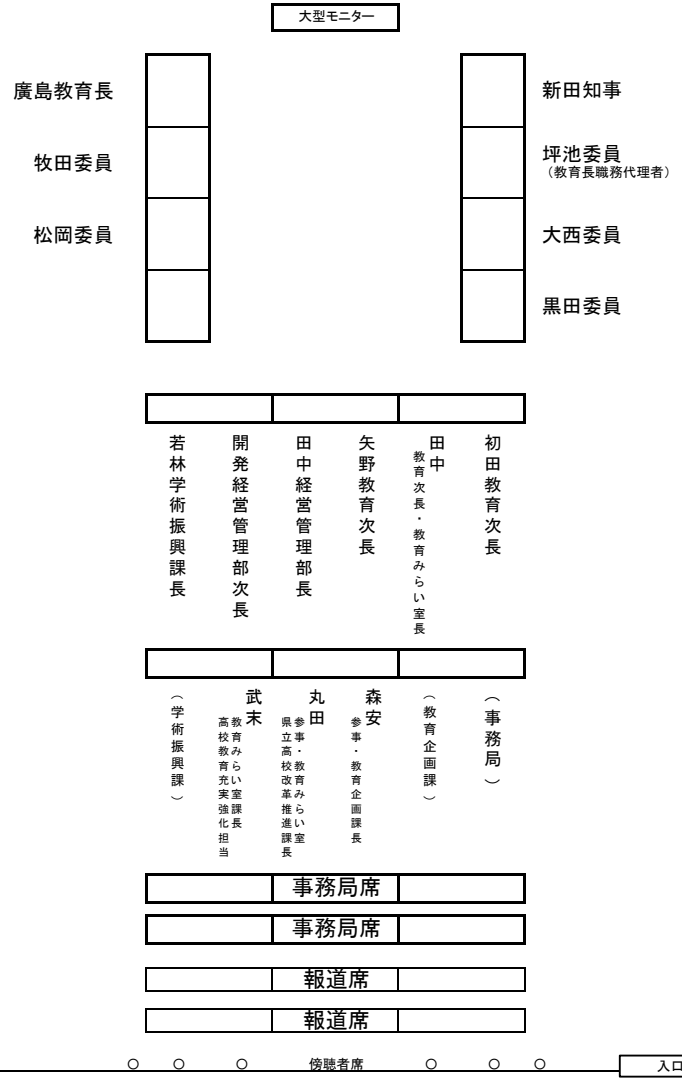
４　報　　告
（１）高校教育改革実行計画の検討状況について
（２）第３期富山県教育大綱の参考指標に関する生徒の意識調査の結果について

５　閉　　会

＜配付資料＞
資料１　第 12 回新時代とやまハイスクール構想検討会議におけるご意見（概要）
資料２　「新時代とやまハイスクール　再構築ガイドライン」
資料３　「新時代とやまハイスクール　第１期設置方針」
資料４　「再構築ガイドライン」及び「第１期設置方針」に係る論点整理
資料５　高校教育改革実行計画の検討状況
資料６　第３期富山県教育大綱の参考指標に関する生徒の意識調査の結果

令和８年度 第１回 富山県総合教育会議　配席図

日 時　令和8年10月30日（金）13:00～14:00
場 所　県庁4階大会議室



令和８年度 第１回 富山県総合教育会議　出席者名簿

（敬称略）

（委　員）

職　　名	氏　　名	備　　考
富山県知事	新 田　八 朗	
富山県教育長	廣 島　伸 一	
富山県教育委員（教育長職務代理者）	坪 池　　宏	元富山県教育次長
富山県教育委員	大西　ゆかり	社会福祉士
富山県教育委員	黒 田　　卓	大学教授
富山県教育委員	牧 田　和 樹	会社社長
富山県教育委員	松 岡　　理	医師

資料１

第 12 回新時代とやまハイスクール構想検討会議(10/16)における検討結果（概要）

○検討会議では、いただいた様々なご意見を整理(資料４)したうえで「再構築ガイドライン」及び「第１期設置方針」の修正案(資料２、資料３)についてご議論いただき、ご了承いただきました。

○今後、その際にいただいたご意見も踏まえ、構想の推進と新たな学校づくりを着実に進めてまいります。

	《検討会議での主なご意見》	《ご意見への対応》
第１期校等の具体化	・学科や教育課程など新たな学校づくりの具体化にあたっては、理想を現場に落とし込み魅力ある学校となるよう、学校現場を交え検討を進めてもらいたい。 ・現場の教員や生徒を巻き込んだ議論を通じて、高校の学びそのものを変えていってもらいたい。 ・第１期校の教育内容の検討には、各校の校長のみならず教務主任など現場の実務者も必要。	新高校を設置する学校内への開設準備室の設置を前倒し、検討体制を整え、学校現場の教員を加えた検討を加速する。
中学生等への分かりやすい情報発信	・子どもたちに見てもらえるよう、動画やアニメーションを活用するなど、中学生や保護者、教員に伝わる情報発信の工夫が必要。 ・どのような学校になるのか分かりにくいという声を聞くので、各学校の学びの特徴や特色などが具体的にイメージできるような発信が必要。	構想の趣旨や新時代ＨＳ等について、動画やＳＮＳなどを活用し、中学生等に必要な情報を分かりやすく届けられるよう情報発信の充実を図る。
学習環境の維持・充実	・募集停止となる学校の生徒が最後まで高校生活に輝きを持てるよう、教育内容や部活動、教員配置などの環境を整えてほしい。	学校現場と連携し、学びの環境の維持・向上に努めるとともに、生徒募集に向けた情報発信を充実する。

資料２



新時代とやま
ハイスクール

再構築ガイドライン



はじめに

このガイドラインは、「新時代とやまハイスクール構想」実施方針を踏まえて、現在の県立高校（全日制）34 校を 7 つの学校類型へと「再構築」していくための基本的な考え方をはじめ、この構想の推進に必要となる要素を細分化して示すものです。

実施方針と同様に、構想を推進するための「羅針盤」として位置付けるものであり、国のグランドデザインも踏まえながら、社会情勢の変化や今後の中学校卒業予定者数の状況などに応じて、必要な場合は見直しを行いつつ、構想を着実に推進していきます。

「新時代とやまハイスクール」再構築ガイドラインの位置づけ

「新時代とやまハイスクール構想」実施方針
（R8.1 月策定）

Ⅰ．県立高校を取り巻く状況
Ⅱ．令和 20 年度までに実現を目指す県立高校の姿
Ⅲ．「目指す姿」から考える「各期の姿」
Ⅳ．今後の進め方

「新時代とやまハイスクール」再構築ガイドライン
（R8.10 月策定予定）

Ⅰ．「再構築」の考え方について
Ⅱ．各期の「再構築」の方向性
Ⅲ．中高一貫教育校（第２期「ＳＴＥＡＭハイスクール」）
Ⅳ．大規模校（第３期「総合選択ハイスクール」）
Ⅴ．構想の着実な推進

第１期設置方針
（R8.10 月策定予定）

１．第１期の「再構築」に係る基本的な考え方
２．グローバルハイスクール
３．未来探求ハイスクール（タイプ1）
４．未来探求ハイスクール（タイプ2）
５．県立高校として使用しなくなる校舎・敷地

第１期設置計画（学校別）
（R9 策定予定）

１．学校規模
２．学科構成
３．学科ごとの主な教育内容
４．活力ある学校・組織づくり
５．選抜方法

第２期設置方針 → 第２期設置計画（学校別）

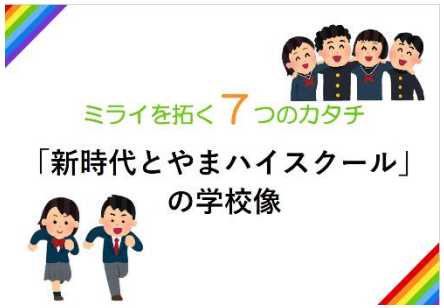
第３期設置方針 → 第３期設置計画（学校別）

新時代とやまハイスクール構想の基本的な考え方はこちらをご覧ください。

「新時代とやまハイスクール構想」実施方針



みらいを拓く７つのカタチ



新時代とやまハイスクールの７つの類型についてイラストを交え、直感的に分かりやすく説明しています
ぜひご覧ください

目　次

Ⅰ.「再構築」の考え方について　・・・１

１.「再構築」の方法

２.「再構築」の検討の流れ

３．各高校における教育内容を踏まえた「再構築」のイメージ

４．新時代ＨＳへの移行手順

Ⅱ．各期の「再構築」の方向性　・・・４

１．実施方針における「各期の姿」

２．第３期（令和２０年度頃）における学科構成（目安）

３．第２期（令和１５年度頃）の「地域共創ハイスクール」設置に向けた方針

４．各期における配置数（目安）

（参考）中学校卒業予定者数と募集定員（目安）

Ⅲ．中高一貫教育校（第２期「ＳＴＥＡＭハイスクール」）　・・・９

１．ねらい

２．教育内容等

３．学校規模

４．中学校入学時の選抜方法

５．設置場所

Ⅳ．大規模校（第３期「総合選択ハイスクール」）　・・・10

１．ねらい

２．教育内容等

３．設置場所

４．学校規模と整備方法

Ⅴ．構想の着実な推進　・・・14

Ⅰ．「再構築」の考え方について

新時代とやまハイスクール構想では、将来あるべき姿を描いたうえで、そこからバックキャスティングの考えで各期の姿を描き、段階的に再編等を行うこととした。このため、全ての県立高校（全日制）34 校を移行準備校と位置付け、これまでの各校の教育内容や教育環境に、将来を見据えた新たな取組みを加え、新しい学校へと「再構築」していく。その際には、生徒に幅広い選択肢を提供する観点から検討を行い、移行準備校の中から適切な敷地を活用する。

１．「再構築」の方法

①これまでの各高校における教育内容をもとに、
②将来を見据えた新たな取組み（教育内容、教育環境、学校運営など）を加え「今後必要と考えられる教育内容」を整理し、
③その教育内容を様々な学校規模で組み合わせ、７つの学校類型に分類したうえで、
④今後の中学校卒業予定者数や通学の利便性を考慮し、新時代とやまハイスクール（以下「新時代ＨＳ」という。）を県内にバランスよく配置する。

２．「再構築」の検討の流れ

実施方針における
新時代ＨＳの７つの類型
・各類型の学校像
（代表的な特徴）
・主たる教育内容

→

① 学校像の具体化に必要な視点を整理する。

② ①を踏まえ、新時代ＨＳの具体像を描く。

→

③ 既存の高校の施設の状況や通学面の状況等から、どの高校敷地を活用することが最適かを検討する。

→

④ ③を踏まえ、県立高校として使用しなくなる校舎・敷地を検討する。

３．各高校における教育内容を踏まえた「再構築」のイメージ

これまでの教育内容

【県東部】

No	高校名	学科	備考
1	入善	普通	自然科学コース・観光ビジネスコース ①④⑤
		農業	⑤⑥
2	桜井	普通	①
		工業	⑥
		家庭	④⑥
3	魚津	普通	①②③
4	魚津工業	工業	⑥
5	滑川	普通	①
		工業	⑥
		商業	④⑥
		水産	⑥
6	上市	総合学	①④⑤⑥
7	雄山	普通	①⑤
		家庭	④⑤⑥
8	中央農業	農業	⑥
9	八尾	普通	福祉コース ①④⑤
10	富山西	普通	①
11	富山	普通	①②③
		探究	①②③
12	富山中部	普通	①②③
		探究	①②③
13	富山北部	普通	体育コース ①④
		工業	⑥
		商業	④⑥
14	富山工業	工業	⑥
15	富山商業	商業	④⑥
16	富山いずみ	総合学	①④⑥
		看護	⑥
17	富山東	普通	自然科学コース ①④
18	富山南	普通	国際コース ①③④
19	呉羽	普通	音楽コース ①④

基本目標の実現に必要と考えられる教育内容

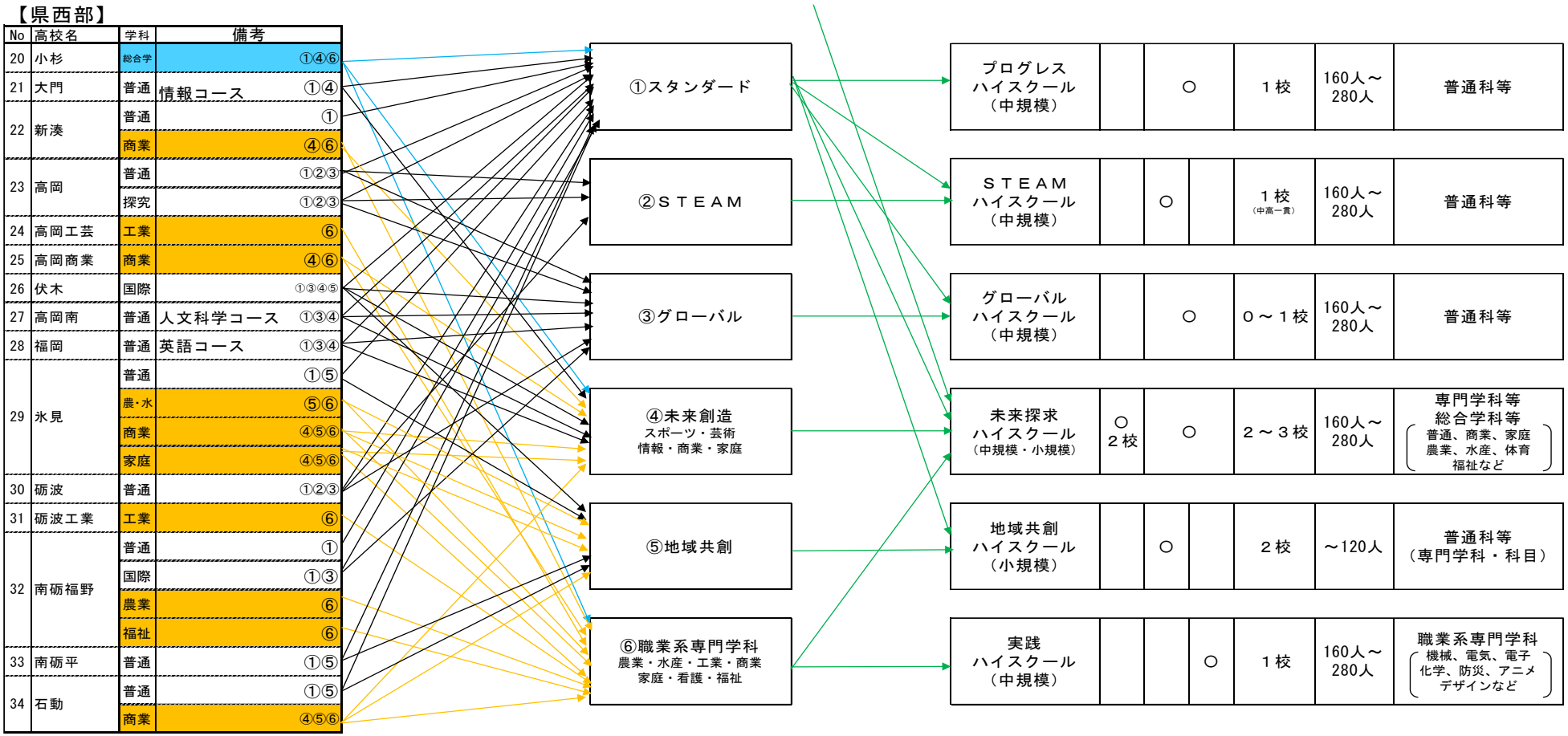
- ①スタンダード
- ②ＳＴＥＡＭ
- ③グローバル
- ④未来創造
  スポーツ・芸術
  情報・商業・家庭
- ⑤地域共創
- ⑥職業系専門学科
  農業・水産・工業・商業
  家庭・看護・福祉
- ⑦エンパワーメント

新時代とやまハイスクール（７類型）

類型	開設時期 １期	開設時期 ２期	開設時期 ３期	R20年度の学校数	学校規模（学年）	学科構成の方向性
プログレス ハイスクール （中規模）		○		２～４校	160人～280人	普通科等
ＳＴＥＡＭ ハイスクール （中規模）		○		１校	160人～280人	普通科等
グローバル ハイスクール （中規模）	○ １校	○		１～２校	160人～280人	普通科等
総合選択 ハイスクール （大規模）			○	１校	480人	普通科等 ＋専門科目 （商業、家庭、体育 芸術、その他）
未来探求 ハイスクール （中規模・小規模）	○ ２校	○		２～３校	160人～280人	専門学科等 総合学科等 （普通、商業、家庭 農業、水産、体育 福祉など）
地域共創 ハイスクール （小規模）		○		２校	～120人	普通科等 （専門学科・科目）
実践 ハイスクール （中規模）			○	１校	160人～280人	職業系専門学科 （機械、電気、電子 化学、防災、アニメ デザインなど）

【県西部】

No	高校名	学科	備考
20	小杉	総合学	①④⑥
21	大門	普通	情報コース ①④
22	新湊	普通	①
		商業	④⑥
23	高岡	普通	①②③
		探究	①②③
24	高岡工芸	工業	⑥
25	高岡商業	商業	④⑥
26	伏木	国際	①③④⑤
27	高岡南	普通	人文科学コース ①③④
28	福岡	普通	英語コース ①③④
29	氷見	普通	①⑤
		農・水	⑤⑥
		商業	④⑤⑥
		家庭	④⑤⑥
30	砺波	普通	①②③
31	砺波工業	工業	⑥
32	南砺福野	普通	①
		国際	①③
		農業	⑥
		福祉	⑥
33	南砺平	普通	①⑤
34	石動	普通	①⑤
		商業	④⑤⑥



４．新時代ＨＳへの移行手順

（１）新時代ＨＳの設置

・移行準備校(34 校)に現在設置されている各学科は、各期に順次、募集停止とし新時代ＨＳを設置していく。

・その上で、新時代ＨＳの学校名等は、敷地を活用することとなる移行準備校の学校名やその変遷等も踏まえ、検討する。

（２）各校におけるこれまでの教育実績の継承とさらなる発展

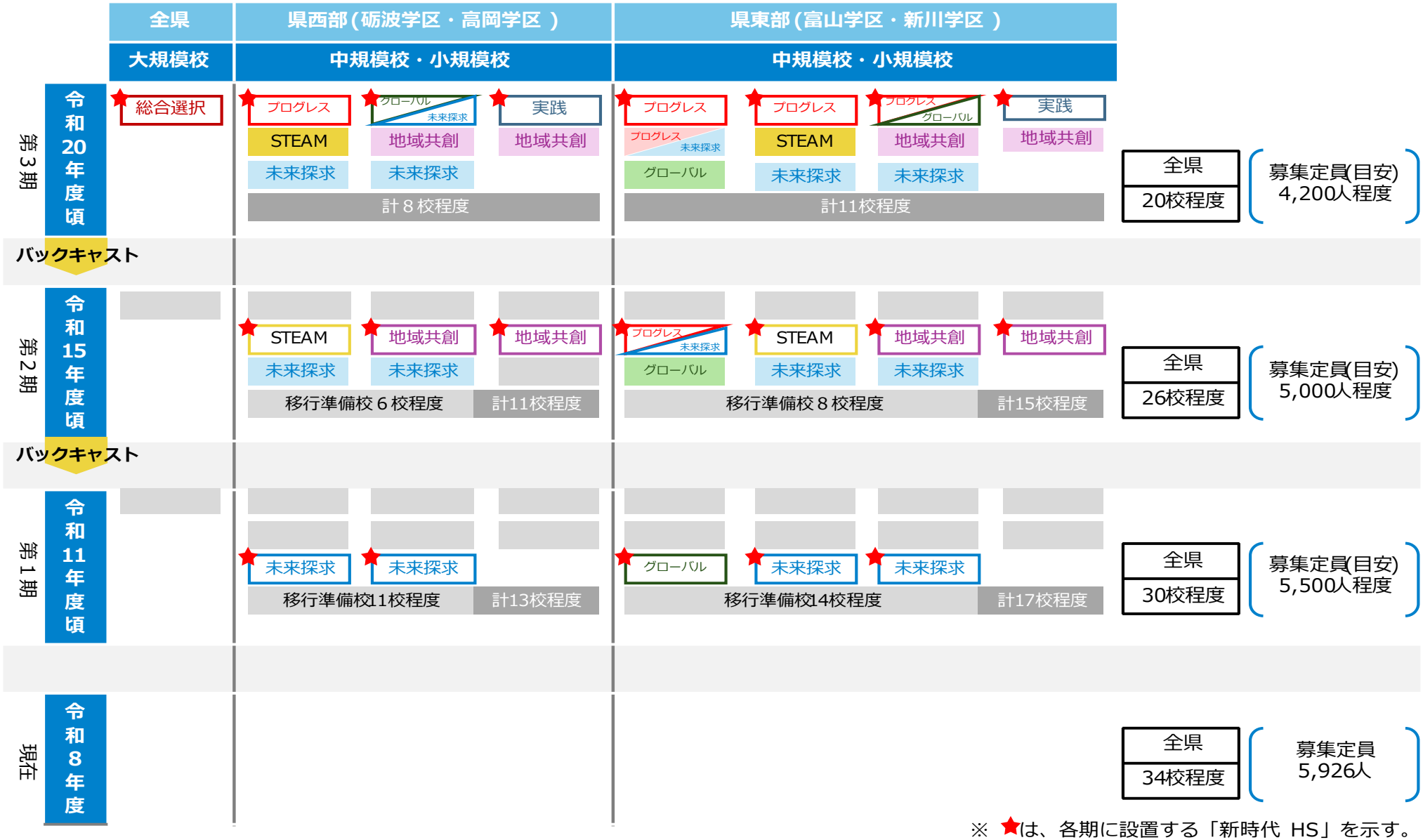
・これまで各校で行われてきた学習活動や特色ある取組み、部活動などを新時代ＨＳに引き継ぐとともに、将来を見据えた新たな取組みを加え再構築する。

Ⅱ．各期の「再構築」の方向性

１．実施方針における「各期の姿」

今後の段階的な「再構築」の着実な推進に向け、次のとおり新時代ハイスクール構想「実施方針」で示した「各期の姿」の明確化を図る。

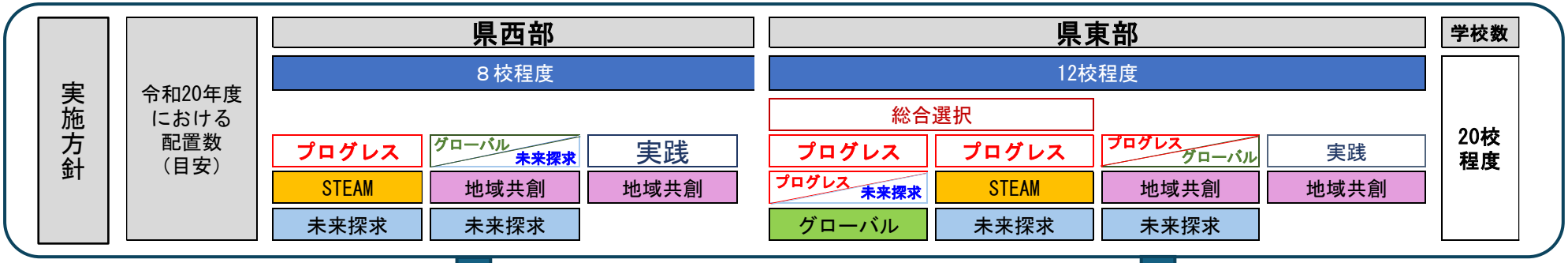
＜実施方針 P. 16　「目指す姿」から考える「各期の姿」＞



※ ★は、各期に設置する「新時代 HS」を示す。

２．第３期（令和 20 年度頃）における学科構成（目安）

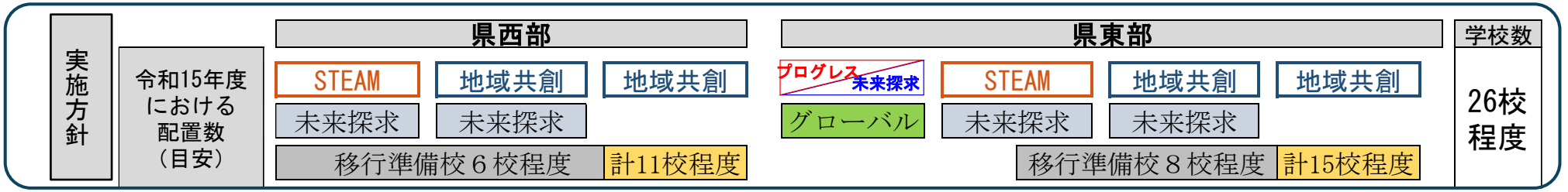
・令和 20 年度における新時代とやまハイスクールの学科構成は、以下を目安とし、今後の社会情勢の変化や中学校卒業予定者数の状況、国の高校改革の方向性等に応じて、必要な場合は、学科改編や新たな学科の設置などの見直しを行いつつ検討を進める。



《学科構成・学校規模（目安）》

	県西部			県東部				
大規模校 480人				総合選択 普通科等＋専門科目 （商業、家庭、体育、芸術、その他）				１校
中規模校 160人～280人	未来探求 専門学科等 （商業、情報、その他）	未来探求 総合学科等 （普通、商業、家庭、農業、体育、福祉など）	ＳＴＥＡＭ 普通科等	未来探求 専門学科等 （商業、情報、その他）	未来探求 総合学科等 （普通、商業、家庭、農業、水産、体育、福祉など）	ＳＴＥＡＭ 普通科等	グローバル 普通科等	15校程度
	プログレス 普通科等	グローバル/未来探求 普通科等 専門学科・科目		プログレス 普通科等	プログレス 普通科等	プログレス/未来探求 普通科等 専門学科・科目	プログレス/グローバル 普通科等 専門学科・科目	
	実践 職業系専門学科 （機械、電気、電子、化学、防災、アニメデザインなど）			実践 職業系専門学科 （機械、電気、電子、化学、防災、アニメデザインなど）				
小規模校 ～120人	地域共創 普通科等 （専門学科・科目）	地域共創 普通科等 （専門学科・科目）		地域共創 普通科等 （専門学科・科目）	地域共創 普通科等 （専門学科・科目）			４校程度
上記のサテライトキャンパス	＋α			＋α				＋α

３．第２期（令和 15 年度頃）の「地域共創ハイスクール」設置に向けた方針



（１）実施方針における「地域共創ハイスクール」の姿

目指すべき学校像	主たる教育内容	学校規模
○地域の協働とフィールドワーク 地域の課題解決や魅力発信に貢献できる力を高める。 ・地元の企業や自治体と連携した探究活動を推進 ・地域の特色ある産業、スポーツ、郷土芸能に関連する探究活動や部活動を充実 ・コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入	「スタンダード」＋「地域共創」 ねらい ふるさとに誇りと愛着を持ち、様々な関係者と協働しながら、地域づくりを担うことができる人材を育成 特色ある取組み（例） ・地元の企業や自治体の抱える課題の解決を図る探究活動を推進 ・地域の特性と高校生の発想を掛け合わせた事業を提案 ・特色ある部活動（スポーツ、郷土芸能など）を充実	・小規模校（１学年１２０人以下） ・小規模校ならではの特色ある教育活動の展開や長期的なニーズ、通学時間の観点から、地域バランスにも配慮して設置する。

（２）「地域共創ＨＳ」の設置に向けた対応

①　第１期

・第２期に設置を目指す「地域共創ハイスクール」については、主に小規模校ならではの特色ある教育活動の展開を目指している。
・現在、各高校で行われている「地域と連携した教育活動」を充実しつつ、第２期の「地域共創ハイスクール」につなげることとなる。
・また、こうした取組みに対する生徒のニーズを考慮した上で、地域バランスにも配慮しながら「地域共創ハイスクール」の設置場所を設定する。

⇒以上の観点から、**第１期の再構築では、市・町に１校のみの県立高校については、募集停止としないこととする。**

②　第２期まで

・各校における地元自治体等との連携活動を整理し、関係者間で情報共有を行いながら、県立高校の魅力化・特色化をさらに進めるとともに、今後、生徒にとってどのような取組みが必要か検討し、地域共創ＨＳの学校像を具体化していく。
・その上で、「地域と連携した特色ある教育活動」や生徒のニーズ、通学時間や地域バランスなどの観点から、地域共創ＨＳを設置するエリアと活用する高校敷地を検討していく。

４．各期における配置数（目安）

・令和 20 年度以降も中学校卒業予定者数の減少が見込まれることを考慮し、１校あたりの定員規模を一定程度確保するとともに、大・中・小規模の学校をバランスよく配置し、生徒に多様な選択肢を提供できるよう、第３期（令和 20 年度）の学校数の目安を 20 校程度とする。

・令和 20 年度の姿からバックキャスティングの考え方で各期の姿を描き、各期の再構築後の移行準備校を含めた県立高校（全日制）の配置数は、第２期（令和 15 年度頃）は 26 校程度、第１期（令和 11 年度）は 31 校とする。

・新時代ＨＳを県内にバランスよく配置していけるよう、公共交通機関等による通学の利便性を考慮し、以下の６エリアごとに各期の配置目安数を示す。

各期の学校数の目安		県西部			県東部			募集定員（目安）１校当たりの平均募集定員
第３期	R⑳年度頃の再構築後 20校程度＋α	８校程度＋α			12校程度＋α			4,200人程度 １校当たり 平均200人程度
		砺波・南砺	高岡・氷見・小矢部	射水	富山	滑川・中新川	魚津・黒部・下新川	
		２～３校	５～６校	１～２校	８～９校	１～２校	２～３校	
	バックキャスト							
第２期	R⑮年度頃の再構築後 26校程度＋α	11校程度＋α			15校程度＋α			5,000人程度 １校当たり 平均190人程度
		砺波・南砺	高岡・氷見・小矢部	射水	富山	滑川・中新川	魚津・黒部・下新川	
		３～４校	６～７校	２校	８～10校	２～３校	３～４校	
	バックキャスト							
第１期	R⑪年度の再構築後 31校	13校			18校			5,500人程度 １校当たり 平均180人程度
		砺波・南砺	高岡・氷見・小矢部	射水	富山	滑川・中新川	魚津・黒部・下新川	
		４校	７校	２校	11校	３校	４校	
	バックキャスト							
現在	R⑧年度 34校	15校			19校			5,926人 １校当たり 平均174人
		砺波・南砺	高岡・氷見・小矢部	射水	富山	滑川・中新川	魚津・黒部・下新川	
		４校	８校	３校	12校	３校	４校	

※学校数の「＋α」はサテライトキャンパスを含む学校数

（参考）

中学校卒業予定者数

	県西部			県東部			全県
	砺波・南砺	高岡・氷見・小矢部	射水	富山	滑川・中新川	魚津・黒部・下新川	
R⑳年度頃	2,426 ▲25.2%			3,584 ▲26.3%			6,010
	515	1,293	618	2,540	490	554	
	▲35.5%	▲23.0%	▲19.3%	▲25.1%	▲24.4%	▲32.8%	▲25.9%
R⑮年度頃	2,929 ▲9.7%			4,258 ▲12.4%			7,187
	642	1,581	706	2,997	587	674	
	▲19.5%	▲5.9%	▲7.8%	▲11.6%	▲9.4%	▲18.2%	▲11.3%
R⑪年度	3,188 ▲1.7%			4,640 ▲4.6%			7,828
	757	1,655	776	3,231	600	809	
	▲5.1%	▲1.5%	＋1.3%	▲4.7%	▲7.4%	▲1.8%	▲3.4%
R⑧年度	3,244			4,863			8,107
	798	1,680	766	3,391	648	824	

※下段の割合は令和８年度に対する減少率

募集定員（目安）※

県西部	県東部	全県
1,700	2,500	4,200
2,050	2,950	5,000
2,250	3,250	5,500
2,436	3,490	5,926

※R⑪年度以降は中学校卒業予定者数の７割を目安に算出

Ⅲ．中高一貫教育校（第２期「ＳＴＥＡＭハイスクール」）

１．ねらい

・「ＳＴＥＡＭ」について継続的かつ計画的に学ぶことや、多様な価値観に接することで、学力だけでなく探究への意欲や思考力・表現力、協働する力を高める。
・本県で初の公立中高一貫教育校となることから、幅広い年齢集団での教育実践や、大学との学術的な連携などの成果や課題を、他の高校や中学校に共有し、様々な地域における学校連携の強化や学びの質の向上につなげる。

２．教育内容等

・中学生と高校生の混合グループによる探究活動を実施し、中学生の探究活動への意欲向上や高校生が中学生に教えることで自分自身の学びを深める機会につなげ、より多角的な視点からテーマを深堀りするなど、「併設型」の特色を活かす。
・こうした中学校及び高校の具体的な教育内容について、県教育委員会と学校関係者によるプロジェクトチームを中心として、今後、検討を進める。

３．学校規模

中学校２学級程度、高校６学級程度を目安として検討する。

４．中学校入学時の選抜方法

文部科学省の公立中高一貫教育校に係る通知等を踏まえ、探究活動に対する意欲、思考力・表現力、協働する力などから総合的に評価することができるよう、今後、小学校・中学校・高校等の関係者と協議しながら検討を進める。

５．設置場所

実施方針において設置場所は県西部を基本としていることを踏まえ、通学の利便性や施設の状況を考慮し、現在の「高岡高校の敷地」を活用する。

（検討の視点）
・ＪＲ氷見線越中中川駅から徒歩５分であり、県西部地域をはじめ広域的に通学が可能。
・探究活動の成果発表等に活用できる記念館（蛍雪館）が整備されている。

Ⅳ．大規模校（第３期「総合選択ハイスクール」）

１．ねらい

・多くの科目や部活動から選択が可能で、多様な考え方に接することにより、他者と協働して社会参画できる力を高める。
・多くの生徒・教員が在籍する施設的にも充実した学校とし、学校の枠を超えた課題研究発表会や探究活動、研究、商品開発・販売など学校連携のパイプ役としての役割を担うことで、学校同士が連携した多彩な教育活動の拡大・充実につなげる。

２．教育内容等

・共通科目に加え、スポーツや芸術に関する専門科目のほか、外国語や職業系専門科目など、多様な科目の中から系統的に組み合わせた学び（学系）を提供する。
・生徒が学年の区分なく興味関心や進路希望に合わせて選択できる教育課程となるよう「単位制」としての開設を視野に検討を進める。
・学科構成や必要となる施設整備等を含めた「整備構想」の策定に向け、今後、県教育委員会内に検討体制を構築し、具体的な検討を進める。

３．設置場所

実施方針において、県全域からの通学を考慮し、公共交通機関の利便性の高い富山市内の県有地（県立高校敷地など）を活用して整備するとしていることを踏まえ、現在の「呉羽高校敷地」を活用する。併せて、隣接する「富山市舞台芸術パーク」の敷地の一部を活用する。その活用エリア等については、富山市と協議を行い決定する。

（検討の視点）
・あいの風とやま鉄道呉羽駅から徒歩５分であり、県全域から広域的に通学が可能。
・「富山市舞台芸術パーク」の活用により、大規模校に必要な敷地の確保が可能。

４．学校規模と整備方法

学校規模や整備方法については、今後の中長期的な生徒数の見通しや生徒のニーズなどを踏まえ、①大規模校の設置による県全体の学校配置への影響や施設設備などの費用対効果を整理しながら、②大規模校のねらいをどのように実現していくかを具体的に検討する必要がある。今後、以下の（１）、（２）の観点でさらに検討を行い、大規模校の整備構想を描いていく。

（１） １学年当たりの学級数による学系独自の選択科目時数の目安

（単位：時間）

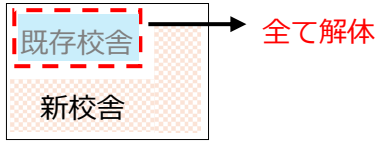
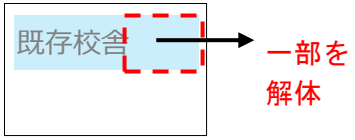
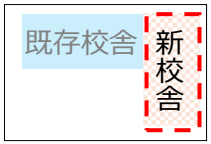
学級数	教員配置数※1	【ａ】 週当たりの 授業時間総数※2	【ｂ】 必履修・共通 選択科目時数※3	【ａ－ｂ】 学系独自の選択科目の開設可能時数※4						
					各学系に必要な時数の目安※5					
					スポーツ 25	音楽 25	美術 25	書道 20	語学 30	職業系専門科目等※6 各 20～30
８学級	64 人程度	960	900	60	○	○	―	―	―	―
10 学級	80 人程度	1,200	1,100	100	○	○	○	○	―	―
12 学級	94 人程度	1,410	1,260	150	○	○	○	○	○	○

※１　普通科（単位制）における標準的な教員配置を想定
※２　便宜上、教員配置数×15 時間（教員１人の週当たり持ち時数）として試算
※３　必履修科目と全学系共通の選択科目を開設するために最低限必要となる時間数
　　便宜上、週当たりの授業時数を 31 時間（総合的な探究の時間を含む。平日は６限授業を基本に１日のみ７限授業と想定）として試算
※４　スポーツ学系、芸術学系、専門分野学系等における独自の選択科目が開設可能となる時間数の目安
※５　各学系に充てる独自の選択科目時数の目安（他県の大規模校の教育課程をもとに試算）
※６　職業系専門科目等は農業、家庭、商業、情報などを想定

（２）整備方法の比較

以下の比較検討をもとに「新築」または「既存施設の活用」を検討する。

①　建設費の目安

建設方法 / 学級数	A. 新築 （既存校舎を全て解体）	B. 一部改築 （既存校舎を一部活用）	C. 増築 （既存校舎を全て活用）
建設方法のイメージ	① 新校舎を新築  ②　既存校舎を全て解体 	① 既存校舎の一部を解体  ② 解体後の跡地に新校舎を増築 	① 既存校舎を全て活用し、校舎を増築 
１学年 12 学級 （建物延床面積：24,900 ㎡）	**約１６０億円** うち　既存校舎解体：約９億円	**約１３５億円** うち　既存校舎解体：約４億円 増築：約 90 億円 長寿命化改修：約 24 億円	**約１２０億円** うち　増築：約 66 億円 長寿命化改修：約 38 億円
１学年 10 学級 （建物延床面積：22,900 ㎡）	**約１５０億円** うち　既存校舎解体：約９億円	**約１２５億円** うち　既存校舎解体：約４億円 増築：約 80 億円 長寿命化改修：約 24 億円	**約１１０億円** うち　増築：約 56 億円 長寿命化改修：約 38 億円

※　建設単価は、過去の県立学校建設時における、構造ごと（ＲＣ造、Ｓ造）の建設単価に令和８年度までの物価上昇率を乗じて算出

② 建設方法ごとのメリット・デメリット

区分		A. 新築 （既存校舎を全て解体）	B. 一部改築 （既存校舎を一部活用）	C. 増築 （既存校舎を全て活用）
比　　較		・**大規模校のねらいとする教育の提供に必要な学校全体の空間設計が可能**。 ・老朽化対策が不要。 ・省エネ性能が高く維持管理費が低く抑えられる。 ・**建設費用が最も高い**。	・既存校舎の一部解体後の跡地に新校舎を建設するため、**工期が最も長い**。 ・その他の項目は中程度。	・**大規模校のねらいとする教育の提供に必要な学校全体の空間設計に難あり**。 ・将来的に**老朽化対策が必要。** ・**維持管理費が高く**なる。 ・**建設費用が最も低い。**
	学校全体の空間設計	**良** 大人数の生徒の一斉移動に配慮した廊下幅も確保可能。	中程度	制約多い
	建 設 費 用※	**多** （12 学級　約 160 億円 10 学級　約 150 億円）	**中間** （12 学級　約 135 億円 10 学級　約 125 億円）	**少** （12 学級　約 120 億円 10 学級　約 110 億円）
	設計・工事期間※	**中間** （７年程度） 現グラウンド等に建設	**多** （8.5 年程度） 既存校舎解体地に建設のため	**少** 5.5 年程度
	老朽化対応	**解消**	残る	**残る** R⑳時点で築 50 年以上となり、将来的に建て替えが必要
	管 理 費 用 **・省エネ性能、維持修繕費**	**少**	中間	**多**

※　令和８年度現在の市場動向等を踏まえたもの

Ⅴ．構想の着実な推進

内容	検討の場	取りまとめ時期
１．第１期「設置計画」の取りまとめ 第１期「設置方針」取りまとめ後、プロジェクトチームを設置し、以下の内容について学校ごとに検討を行い「設置計画」を取りまとめる。 ① 学校規模 ② 学科構成 ③ 学科ごとの主な教育内容 ④ 活力ある学校・組織づくり ⑤ 選抜方法 「設置計画」を取りまとめた後、第１期校の学校像をわかりやすく説明する中学生向け資料を作成し、中学生や保護者、中学校教職員に対し、高校の特色や教育内容、進路について理解を深めることができるよう、広報の充実などにより早期の情報提供に努める。	教育委員会事務局及び学校関係者によるプロジェクトチーム 総合教育会議	令和９年中を目途
２．県立高校の魅力向上・特色化の推進 国のネクストハイスクール構想を踏まえ、国交付金等を活用しながら、地元自治体や地域、企業、高等教育機関等と連携し、県立高校の魅力向上や特色化を推進するとともに、各校の特色を中学生や保護者に理解いただけるよう、広報の充実などにより情報発信に努める。	有識者会議等 総合教育会議	・高校教育改革実行計画は令和８年度中を目途 ・同実行計画に基づく取組みは随時
３．第２期・第３期「設置方針」及び「設置計画」 各期における新時代ＨＳを着実に設置できるよう適宜、検討を進める。	総合教育会議 有識者会議等	新時代ＨＳ設置の ３年度前「設置方針」 ２年度前「設置計画」
４．中高一貫教育校の検討 教育委員会事務局、小中学校及び高校の校長等による検討体制を整備し、高岡市と連携しながら以下の内容等について検討を進め、総合教育会議において「中高一貫教育校設置方針」を取りまとめる。 ・学級数　・教育内容（教育課程）　・特色ある取組み ・学校運営　・必要となる施設設備　など	教育委員会事務局 総合教育会議	令和９年度中を目途

５．大規模校の検討 教育委員会事務局による検討体制を整備し、以下の内容等について検討を進め、総合教育会議において「整備構想」を取りまとめる。 ・学級数　・整備方法	教育委員会事務局 総合教育会議	令和９年度中を目途に方向性を取りまとめ
６．学校名の検討の方向性 本県県立高校の名称の特徴や変遷等を踏まえ、以下の点に留意しながら、「こどもまんなか」の視点で検討する。 ①　所在する地域が分かること ②　親しみやすく、分かりやすいこと 新たな学校名とする場合は、「条例改正案」を取りまとめる。	有識者会議等 （第１期は新時代とやまハイスクール構想検討会議） 総合教育会議 ※条例改正案は総合教育会議で取りまとめ	新時代ＨＳ設置の２年度前 （第１期は令和９年度中を目途）
７．募集停止となる学校の学習環境等 在籍する生徒が卒業するまでの間、充実した学校生活を送ることができる学習環境とするため、教員の確保や学校外との連携を支援する。また、部活動の充実に必要な支援についても学校現場の意見を聞きながら検討し、対応する。	教育委員会事務局	在籍する生徒が卒業するまでの間
８．同窓会の検討の方向性 募集停止となる学校の同窓会の取扱いについては、同窓会運営センターの設置等、今後、関係者のご意見をお聞きしながら具体的な検討を進める。	教育委員会事務局	・取り扱いの方向性は令和９年度を目途 ・個別の取り扱いは随時
９．県立高校として使用しなくなる校舎・敷地の活用方法 地域のニーズや住民の声、地方創生の観点等を勘案し、地元の市町村の意向を十分考慮しながら、今後検討・協議することとする。	県（知事部局及び教育委員会事務局）	随時

資料３





グローバルハイスクール

新時代とやまハイスクール

第 １ 期 設 置 方 針

未来探求ハイスクール





目次

１．第１期の「再構築」に係る基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
（１）「新時代ＨＳの設置場所」についての検討の流れ
（２）「県立高校として使用しなくなる校舎・敷地」についての検討の流れ
（３）新時代ＨＳへの移行手順

２．グローバルハイスクール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（１）具体像
（２）教育内容・学科構成
（３）学校規模
（４）活用する校舎・敷地

３．未来探求ハイスクール（タイプ１「得意を生かせる学校」）・・・・・・・・・・・・・・・５
（１）具体像
（２）教育内容・学科構成
（３）学校規模
（４）活用する校舎・敷地

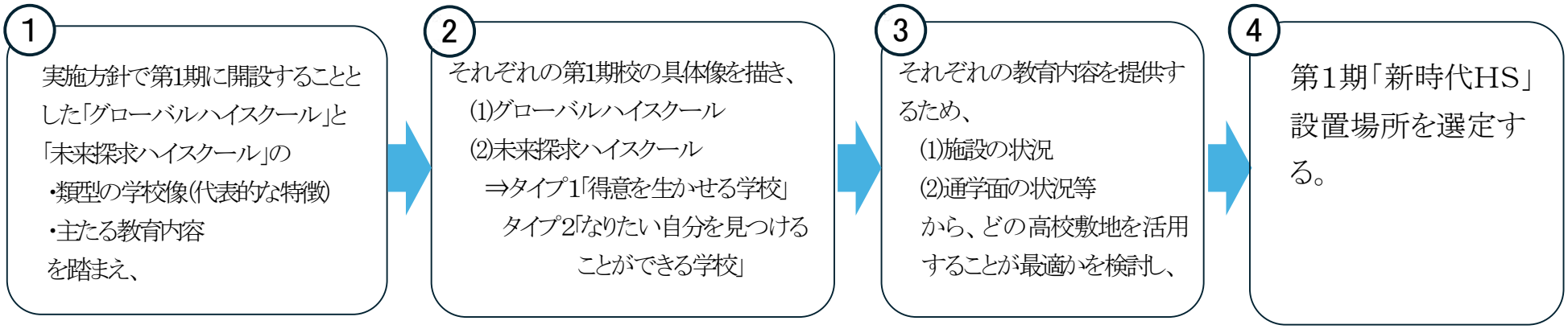
４．未来探求ハイスクール（タイプ２「なりたい自分を見つけることができる学校）・・・・・８
（１）具体像
（２）教育内容・学科構成
（３）学校規模
（４）活用する校舎・敷地

５．県立高校として使用しなくなる校舎・敷地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
（１）滑川・中新川エリア
（２）富山エリア
（３）射水エリア
（４）高岡・氷見・小矢部エリア

１　第１期の「再構築」に係る基本的な考え方

「新時代とやまハイスクール構想実施方針」及び「新時代とやまハイスクール再構築ガイドライン」を踏まえ、第１期の「再構築」の具体化を検討。

（１）「新時代とやまハイスクール（以下「新時代ＨＳ」という。）の設置場所」についての検討の流れ



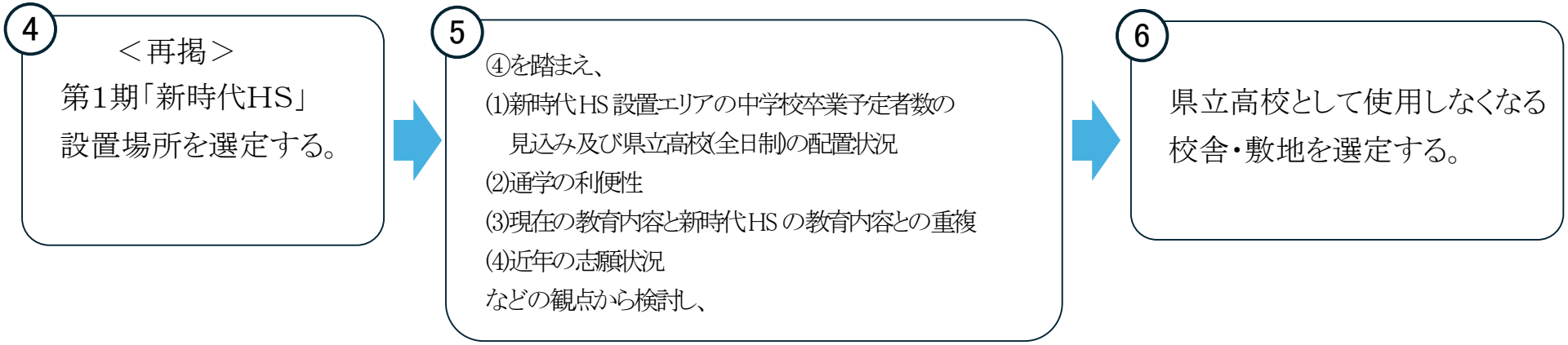
《第１期新時代ＨＳの設置エリア》

・第１期校は、これまでにない特色ある学校となることから、より多くの生徒が通学できるよう、県中央部の４エリアに設置する。

・また、グローバルハイスクールは当面の間、県内に１校の設置となることから全県からの通学の利便性を考慮する。

県西部			県東部		
砺波・南砺	高岡・氷見・小矢部	射水	富山	滑川・中新川	魚津・黒部・下新川
	・未来探求ＨＳ （タイプ１とタイプ２を１校ずつ）	・未来探求ＨＳ	・グローバルＨＳ ・未来探求ＨＳ （タイプ１とタイプ２を１校ずつ）	・未来探求ＨＳ	

（２）「県立高校として使用しなくなる校舎・敷地」についての検討の流れ



（３） 新時代ＨＳへの移行手順

《新時代ＨＳの設置》

・移行準備校(34 校)に現在設置されている各学科は、各期に順次、募集停止とし新時代ＨＳを設置していく。

・その上で、新時代ＨＳの学校名等は、敷地を活用することとなる移行準備校の学校名やその変遷等も踏まえ、検討する。

《各校におけるこれまでの教育実績の継承とさらなる発展》

・これまで各校で行われてきた学習活動や特色ある取組み、部活動などを新時代ＨＳに引き継ぐとともに、将来を見据えた新たな取組みを加え再構築する。

２　グローバルハイスクール

（１）具体像



世界とつながりながら、思考し発信する力を磨く学校



《身に付けられる資質や能力》

- 地域と世界の課題を多面的に探究し、本質を見極める力
- 多様な文化や価値観を尊重し、対話と協働を通して新たな価値を創造する力
- 地域社会や日本について自らの考えを論理的に構築し、英語で世界へ発信する力

《取組み例》　※今後の各校の学校づくりの検討の中で更に具体化していく

●探究的手法による学び

・各教科・科目において、教科等横断的な視点を取り入れ、「探究×生成 AI」による学びを推進する。

・国際問題、環境、科学技術、多文化共生、地域課題などをテーマに、グローバルな視点から自ら問いを立て、情報を収集・分析し、考察・発信する探究活動を行う。

●英語表現力を高める学び

・英語の授業において、「英語×生成 AI」による学びを活用し、英語ディベート、英語プレゼンテーション、エッセイライティング、英会話など、自分の意見を英語で表現する活動を重視する。

●異文化理解につながる学び

・世界の歴史・宗教・文化や人々の多様な価値観を学び、国際社会への理解を深める。

・海外の高校生と交流し、学校生活や文化の違いについて英語で学び合い、世界中に多様な価値観を持つ友人のネットワークを広げる。

●英語実践力・発信力を育成する学び

・外国人教師の複数配置、オンラインによる海外の学校との継続的な交流や合同授業、短期海外研修などを通して、世界に開かれた学びを実践する。

・海外の生徒や学生とチームで環境問題や SDGs などの世界共通の課題の解決に挑戦し、自分たちが考えた解決策を英語で世界に発信する。

（２）教育内容・学科構成

・１年次には、全ての生徒が英語による授業などにより英語実践力・発信力を身に付ける。
・２年次からは、グローバルコース(40～80 名程度)を開設する。
・グローバルコースでは、国内大学の総合型選抜への対応や海外進学も視野に英語力の向上、探究活動の充実を図る。
・教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成を推進し、探究活動、特色・魅力ある文理融合的な学びを実現するための学科のあり方について検討を進める。

<table>
<tr><td>３年次</td><td rowspan="2">グローバルコース</td><td rowspan="2">コース生以外
※グローバルコースの授業を一部履修可能
※希望者は短期留学等への参加可能</td></tr>
<tr><td>２年次</td></tr>
<tr><td>１年次</td><td colspan="2">英語による授業、異文化理解につながる探究活動：１年次全員履修</td></tr>
</table>

（３）学校規模

・生徒に特色ある「新時代ＨＳ」の選択肢を提供すること、中規模校の中でも一定の生徒数を確保することで教員配置数の確保を含む教育環境の充実などの観点から、６学級を基本として検討する。

（４）活用する校舎・敷地

「富山高校の校舎・敷地」を活用する

（検討の視点）
・一斉授業⇔グループワーク⇔個別学習をシームレスに展開し、発展的な探究活動に活用できる可動式の椅子やオンライン会議機能を備えた電子黒板などが整備されている。
・探究活動の成果発表等に活用できる多目的ホール（ミルクホール）が整備されている。
・現在、探究科学科が設置されており発展的な探究活動につながる素地がある。
・グローバルハイスクールは、当面の間、県内に１校の設置となることから全県からの通学の利便性を考慮する。
（富山駅から約 20 分）

３　未来探求ハイスクール（タイプ１　「得意を生かせる学校」）

（１）具体像



得意を生かした専門的な学びを通して
未来を切り拓く力を育む学校



《身に付けられる資質や能力》

・自らの目標に向かって、学び続ける姿勢
・専門分野の深い知識・技術・実践的能力
・「強み」を生かして社会をよりよくできる力

《取組み例》　※今後の各校の学校づくりの検討の中で更に具体化していく

・「各専門分野（スポーツ、芸術、情報、商業、家庭など）×社会課題」
専門分野の知識や技術を活用した探究活動により、社会課題の解決に生かす力を育成する。学びの成果を社会に発信するため、地域公開イベントの開催にも取り組む。

各専門分野（スポーツ、芸術、情報、商業、家庭など）の視点からまちおこしプロジェクトを提案する。生徒が企画・運営する「まちフェス」を開催する。

・「各専門分野（スポーツ、芸術、情報、商業、家庭など）×AI・データサイエンス」
「AI・データサイエンスを武器に未来をつくる」をテーマに、活用機会の増大に対応した実践的な情報教育を推進する。

VR（仮想現実）、AR（拡張現実）、MR（複合現実）での販売実習、スポーツ分野における AI・データサイエンスの活用による戦術分析などを行う。AR（拡張現実）により課題解決のシミュレーションを行う。

・より専門性の高い学びを実践するため、外部人材（企業、大学等）を活用する。

プロのスポーツ選手や芸術家との交流、地元企業や YouTuber 等とコラボした企画・開発を行う。

・週に１～４日は午前授業（４時間）のみとし、大学等と連携した専門的な学びや部活動など、自分が「夢中になれる時間」を充実させる。

午後は企業での就業実践や大学・専門学校で情報分野の専門的な学習等に取り組む。科学的根拠に基づくトレーニングを実践し、競技力向上に必要な知識と技術を習得する。

・スポーツ及び文化・芸術等の分野において、高い成果が期待できる部活動を強化指定部とし、部活動に打ち込める環境を整備する。（指導体制の充実、施設・設備の整備、部活動の時間を十分に確保できるような柔軟な教育課程の編成）

トレーナーや栄養士等の派遣によるサポート体制を構築する。プロクラブ等との連携により、第一線の指導を継続的に受けられる環境を整備する。

（２）教育内容・学科構成

・情報教育を充実させる学科、職業系専門科目を学ぶ学科、その他、生徒のニーズに対応した学科を開設する。
・１年次には、全ての生徒が、専門性を生かしたキャリア形成や社会貢献について学ぶ。（学校設定科目）
・２年次以降は、興味関心や進路希望に応じて他学科の科目も選択できる仕組みとする。
・「余白の時間」を創出し、多様な学びを実現する。

《学科構成のイメージ》

３年次	※他学科の科目も選択できる仕組み　　※「余白の時間」による多様な学び
２年次	商業科の学び　×　ＡＩ・情報　×　各種専門分野 （スポーツ、文化・芸術など）
１年次	専門性を生かしたキャリア形成や社会貢献に関する学習（学校設定科目）：１年次全員履修

※具体的な設置学科については、「設置方針」を取りまとめた後、教育委員会や学校関係者によるプロジェクトチームにおいて検討する。

《教育課程のイメージ》

・卒業に必要な単位数を最低限の 74 単位とし、「余白の時間」（※）を創出する。
・「余白の時間」は、生徒が興味関心や進路希望に応じて、①学校内での授業（探究活動含む）、②部活動、③学校外での学修（大学や専門学校での専門的な学びなど）に活用する。

１年次(25 単位)

	月	火	水	木	金
１限	1	5	11	15	21
２限	2	6	12	16	22
３限	3	7	13	17	23
４限	4	8	14	18	24
５限	※	9	※	19	25
６限	※	10	※	20	※

２年次（25 単位）

	月	火	水	木	金
１限	1	5	11	15	21
２限	2	6	12	16	22
３限	3	7	13	17	23
４限	4	8	14	18	24
５限	※	9	※	19	25
６限	※	10	※	20	※

３年次（24 単位）

	月	火	水	木	金
１限	1	5	11	15	21
２限	2	6	12	16	22
３限	3	7	13	17	23
４限	4	8	14	18	24
５限	※	9	※	19	※
６限	※	10	※	20	※

（３）学校規模

・生徒への特色ある「新時代ＨＳ」の選択肢を提供する観点や、中規模校の中でも一定の生徒数を確保することで教員配置数の確保を含む教育環境の充実や学校行事・部活動の活性化の観点などから、６学級を基本として検討する。

（４）活用する校舎・敷地

《県東部》

「富山商業高校の校舎・敷地」を活用する

（検討の視点）

・商業や情報などの専門科目の開設が可能な実習特別教室棟が整備されている。
・充実した部活動の展開が可能な野球部専用グラウンドのほか、弓道場や複数の部室を有している。
・情報教育の内容は、現在、商業科で行われている教育活動との親和性が高い。
・「余白の時間」を活用して隣接する富山大学や富山工業高校と連携した教育活動の展開が期待できる。
・富山駅から 22 分（市内電車 12 分、徒歩 10 分）であり、県東部地域から広域的に通学が可能。

《県西部》

「高岡商業高校の校舎・敷地」を活用する

（検討の視点）

・商業や情報などの専門科目の開設が可能な商業科実習室が整備されている。
・充実した部活動の展開が可能な第２グラウンド、補助グラウンド、球技運動場（テニス、ハンドボール）を有している。
・情報教育の内容は、現在、商業科で行われている教育活動との親和性が高い。
・「余白の時間」を活用して近隣の高岡高校や高岡工芸高校と連携した教育活動の展開が期待できる。
・高岡駅からバスで約 10 分、自転車で約 15 分であり、県西部地域から広域的に通学が可能。

４　未来探求ハイスクール（タイプ２　「なりたい自分を見つけることができる学校」）

（１）具体像





多様な学びを通じ「なりたい自分」を見つけ
未来を切り拓く力を育む学校

《身に付けられる資質や能力》

- 自分自身の興味関心や適性を理解し、進路目標を描くことができる力
- 進路目標に向け、自分のペースで着実に学習活動等に取り組むことができる力
- 自分自身の個性を「強み」とし、共生社会をデザインできる力

《取組み例》　※今後の各校の学校づくりの検討の中で更に具体化していく

・学校外とも連携し、多様な職業観を養うことで「やりたいこと」を見つけ、「なりたい自分」を描くことができるキャリア教育を充実する。

・自分自身の適性や進路目標に合わせて「多様な科目から興味関心や適性に合った学習内容を選択できる」仕組みを導入し、自分の可能性を広げながら、未来の進路を主体的に切り拓く力を育む。

・分野の枠を超えた学びにより、生徒同士の交流や新たな気づきを生み出す機会をつくる。

興味関心が異なる仲間と協力して学校の魅力を発信する「学校フェス」を企画・運営する。

・「基礎学力の定着」や「発展的な学び」など多様な学習ニーズ、個々の習熟度に対応した個別最適な学習環境を整備する。

・週に１～４日は午前授業（４時間）のみとし、学校外（大学の授業受講、地域貢献活動など）での体験的な活動など、自分の「可能性を広げる時間」とする。

午後は地元企業との連携による商品開発や就業体験、高等教育機関への進学を目指した発展的な学習・大学や専門学校での専門的な学習、地域住民の方も参加するサークル活動、外国人生徒のための日本語学習や学び直しなどに取り組む。

・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、日本語指導員などの配置を充実させ、個に応じた手厚いサポートで生徒の自信を育む学びを支援する。

放課後等の時間を活用した外部人材（教員志望の大学生、ＮＰＯ法人、教員ＯＢなど）による学習支援を行う。

（２）教育内容・学科構成

・１年次には、幅広い分野の学びに触れる機会を設ける。（学校設定科目）

・２年次からは、複数の系列の科目から自分自身の興味関心や進路希望に応じて学習内容を選択できる仕組みを設ける。

・入学後に自分自身の興味関心や進路希望に応じて学習内容を選択できるよう、柔軟な教育課程や円滑な学校運営などの観点からより効果が期待できると考えられる「総合学科」としての開設を視野に検討を進める。また、外国人生徒に係る特別入学枠を含む誰一人取り残されない教育の実現を目指す。

《学科構成のイメージ》

<table>
<tr><td rowspan="2">３年次</td><td colspan="3">普通系学科の系列</td><td colspan="3">職業系専門学科の系列</td></tr>
<tr><td rowspan="2">２年次</td><td>Ａ系列</td><td>Ｂ系列</td><td>Ｃ系列</td><td>Ｄ系列</td><td>Ｅ系列</td><td>Ｆ系列</td></tr>
<tr><td colspan="6">※他系列の科目も履修可能</td></tr>
<tr><td>１年次</td><td colspan="6">幅広い分野の学び
（学校設定科目）</td></tr>
</table>

《系列の例》
- 理数系科目を中心に学ぶ系列
- 外国語科目を中心に学ぶ系列
- 家庭科目を中心に学ぶ系列
- 芸術科目を中心に学ぶ系列

※具体的な設置系列については、「設置方針」を取りまとめた後、教育委員会や学校関係者によるプロジェクトチームにおいて検討する。

《教育課程のイメージ》

・卒業に必要な単位数を最低限の 74 単位とし、「余白の時間」（※）を創出する。

・「余白の時間」は、生徒が興味関心や進路希望に応じて、①学校内での授業（探究活動含む）、②部活動、③学校外での学修（大学専門学校での専門的な学び）、④個別最適な学びに活用する。

１年次(25 単位)

	月	火	水	木	金
１限	1	5	11	15	21
２限	2	6	12	16	22
３限	3	7	13	17	23
４限	4	8	14	18	24
５限	※	9	※	19	25
６限	※	10	※	20	※

２年次（25 単位）

	月	火	水	木	金
１限	1	5	11	15	21
２限	2	6	12	16	22
３限	3	7	13	17	23
４限	4	8	14	18	24
５限	※	9	※	19	25
６限	※	10	※	20	※

３年次（24 単位）

	月	火	水	木	金
１限	1	5	11	15	21
２限	2	6	12	16	22
３限	3	7	13	17	23
４限	4	8	14	18	24
５限	※	9	※	19	※
６限	※	10	※	20	※

（３）学校規模

・生徒への特色ある「新時代ＨＳ」の選択肢を提供する観点や、中規模校の中でも一定の生徒数を確保することで教員配置数の確保を含む教育環境の充実や学校行事・部活動の活性化の観点などから、６学級を基本として検討する。

（４）活用する校舎・敷地

《県東部》

「滑川高校の校舎・敷地」を活用する

（検討の視点）

・多様な科目の開設が可能な栽培漁業、船舶エンジン、水産食品加工の３分野に対応した実習棟、大型水槽、全国的にも設置の少ない薬業に関する実習機器などが整備されている。
・「余白の時間」を活用して近隣の企業等と連携した教育活動の展開が期待できる。
・地鉄西滑川駅から徒歩 10 分、あいの風とやま鉄道滑川駅から徒歩 30 分と県東部地域から広域的に通学が可能。

《県西部》

「小杉高校の校舎・敷地」を活用する

（検討の視点）

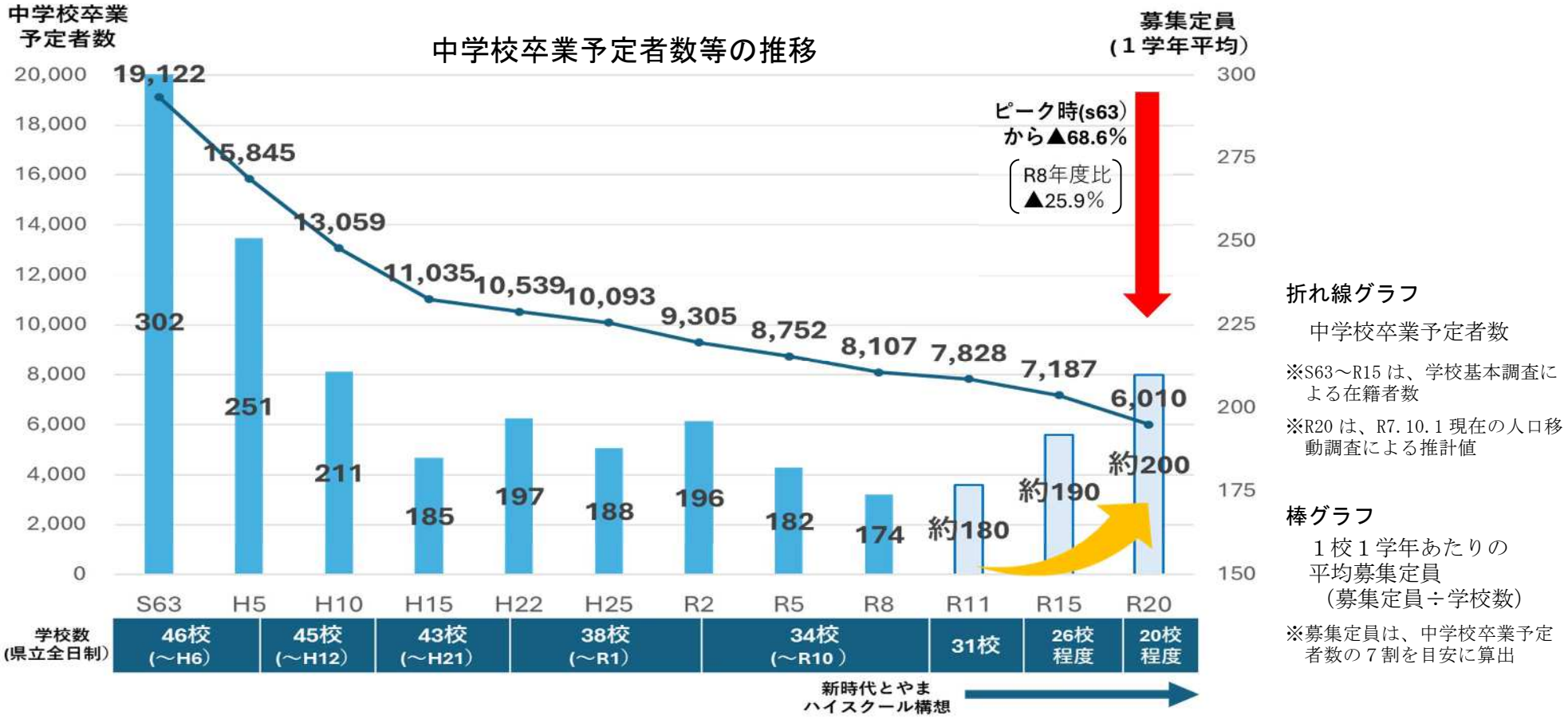
・多様な科目の開設が可能な、情報、工業、福祉、美術などの実習設備が整備されている。
・「余白の時間」を活用して近隣の富山県立大学や富山福祉短期大学と連携した教育活動の展開が期待できる。
・あいの風とやま鉄道小杉駅から徒歩 15 分と県西部地域から広域的に通学が可能。

５．県立高校として使用しなくなる校舎・敷地

・今後、中学校卒業予定者数は、下記グラフのとおり令和８年度の 8,107 人から令和 20 年度には 6,010 人（令和８年度比▲25.9%）まで減少する見込みであり、生徒一人ひとりの興味や進路希望により幅広く応え、特色ある教育活動をさらに充実させていくためには、現在の県立高校（全日制）34 校を 20 校程度とし、１校あたりの生徒数を一定程度確保する必要がある。

・こうしたことから、第１期の新時代ハイスクールとして活用する校舎・敷地を踏まえ、県立高校として使用しなくなる校舎、敷地について、次の観点から検討を行った。

① 新時代ＨＳ設置エリアの中学校卒業予定者数の見込み及び県立高校（全日制）の配置状況
② 通学の利便性
③ 現在の教育内容と新時代ＨＳの教育内容との重複
④ 近年の志願状況　など



折れ線グラフ
中学校卒業予定者数

※S63～R15 は、学校基本調査による在籍者数

※R20 は、R7.10.1 現在の人口移動調査による推計値

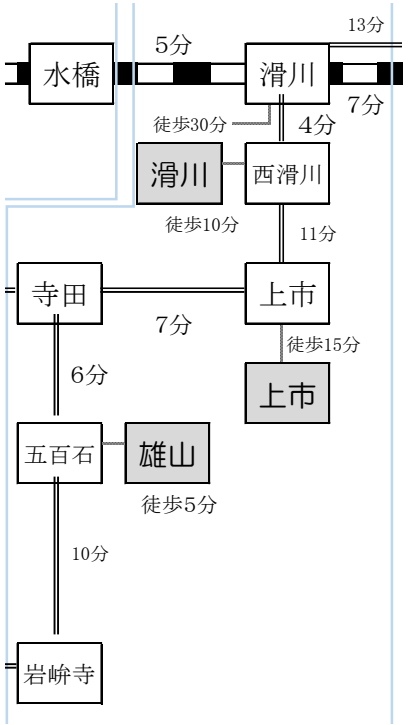
棒グラフ
１校１学年あたりの平均募集定員（募集定員÷学校数）

※募集定員は、中学校卒業予定者数の７割を目安に算出

（１）滑川・中新川エリア

①県立高校（全日制）の設置状況

滑川高校（普通科、薬業科、商業科、海洋科）	第１期校として活用
上市高校（総合学科）	町に１校
雄山高校（普通科、生活文化科）	町に１校



上市高校、雄山高校ともに町に１校のみの県立高校であることから、「新時代とやまハイスクール再構築ガイドライン」の「第２期（令和15年度頃）の『地域共創ハイスクール』設置に向けた方針」に基づき、第１期の再構築では、募集停止としない。

（２）富山エリア

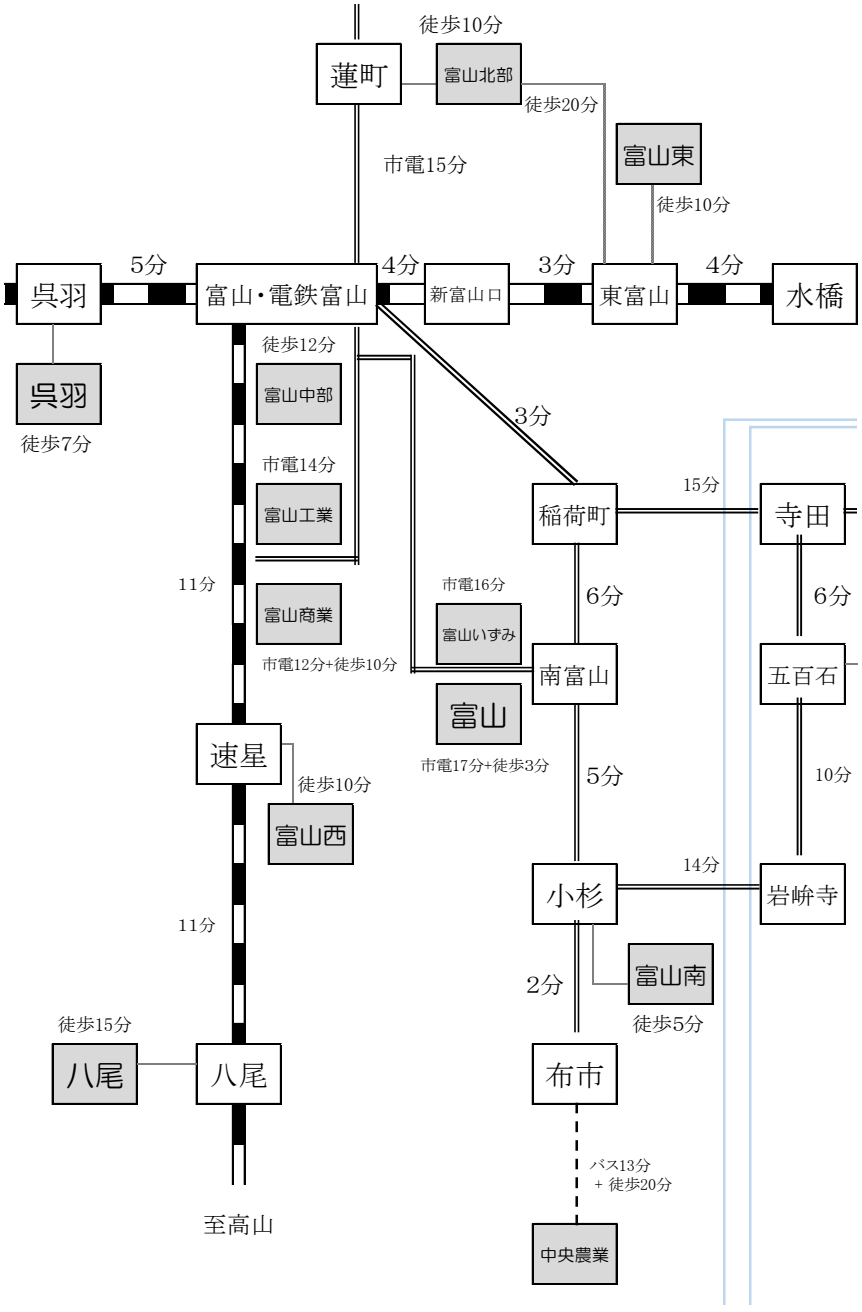
①県立高校（全日制）の設置状況

中央農業高校（農業科）	
八尾高校（普通科）	
富山西高校（普通科）	
富山高校（普通科、探究科学科）	第１期校として活用
富山中部高校（普通科、探究科学科）	
富山北部高校（普通科、くすり・バイオ科、情報デザイン科）	
富山工業高校（工業科）	
富山商業高校（商業科）	第１期校として活用
富山いずみ高校（総合学科、看護科）	
富山東高校（普通科）	
富山南高校（普通科）	
呉羽高校（普通科）	第３期校として活用

当エリアのうち、第１期校として活用する富山高校、富山商業高校がある富山市中央部には、富山西高校、富山中部高校、富山工業高校、富山いずみ高校の４校が設置されている。

②通学の便

富山西高校	富山駅から 21 分 （ＪＲ高山線 11 分＋速星駅から徒歩 10 分）
富山中部高校	富山駅から 12 分 （徒歩）
富山工業高校	富山駅から 17 分 （市内電車 14 分＋大学前駅から徒歩３分）
富山いずみ高校	富山駅から 17 分 （市内電車 16 分＋堀川小泉駅から徒歩１分）



③教育内容

富山中部高校における探究的な学び、富山西高校、富山いずみ高校における多様な学びは、それぞれ第１期に設置するグローバルハイスクール、未来探求ハイスクールの教育内容と共通する部分が多い。富山工業高校の教育内容は第１期校と共通する内容が少ない。

④志願状況（直近５年平均）、地元進学率（３年平均の比較 R3-R5⇒R6-R8）

富山西高校	普通科 0.72 倍	【参考】富山市内中学校からの進学割合 富山西高校　3.8%⇒2.8% 富山中部高校　5.9%⇒5.3% 富山いずみ高校　4.6%⇒4.7%
富山中部高校	普通科 0.45 倍、探究科学科 2.32 倍	
富山いずみ高校	総合学科 1.40 倍、看護科 1.14 倍	

こうした観点から検討し、富山西高校を令和 11 年度より募集停止とし、下記のとおり発展的に再構築する。

・富山西高校で築き上げてきた教育実績や特色ある取組み、また現在行われている体育、芸術、家庭、情報などの多様な科目から選択できる学びや特色ある部活動などを、富山商業高校敷地に設置する未来探求ハイスクールに引き継ぐとともに、将来を見据えた新たな取組みを加え再構築する。

・併せて、多様な科目から選択できる学びを、その他の未来探求ハイスクールにおいても活かし、さらに充実させていく。

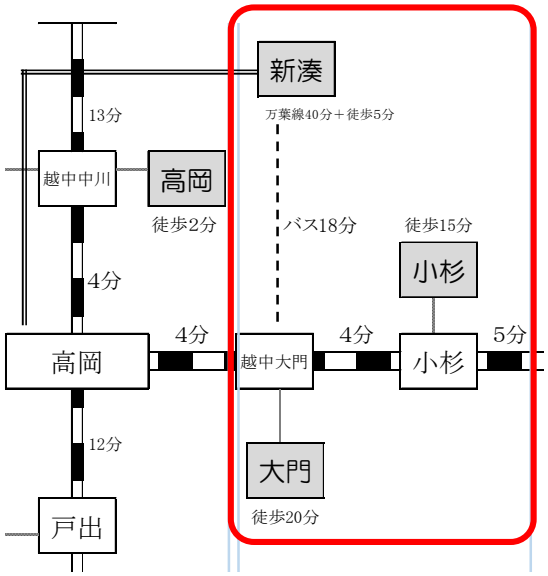
（３）射水エリア

①県立高校（全日制）の設置状況

小杉高校（総合学科）	第１期校として活用
大門高校（普通科）	
新湊高校（普通科、商業科）	

②通学の便

大門高校	越中大門駅(あいの風富山鉄道)から徒歩 20 分
新湊高校	西新湊駅（万葉線）から徒歩５分



③教育内容

大門高校における情報教育、新湊高校における商業教育は、第１期に東西各１校設置する未来探求ハイスクール（タイプ１）の教育内容と共通する部分が多い。

④志願状況（直近５年平均）、地元進学率（３年平均の比較 R3-R5⇒R6-R8）

大門高校	普通科 1.01 倍	【参考】射水市内中学校からの進学割合 小杉高校　8.3%⇒7.4% 大門高校　6.5%⇒6.3% 新湊高校　9.7%⇒9.3%
新湊高校	普通科 0.88 倍、商業科 1.10 倍	

こうした観点から検討し、大門高校を令和 11 年度より募集停止とし、下記のとおり発展的に再構築する。

- **大門高校で築き上げてきた教育実績や特色ある取組み、また現在行われている富山県立大学との大学連携や地域連携プログラムについては、小杉高校敷地に設置する未来探求ハイスクール（タイプ２）に引き継ぐとともに、将来を見据えた新たな取組みを加え再構築する。**
- **併せて、情報コースの専門的な学びを未来探求ハイスクール（タイプ１）における「商業科の学び×ＡＩ・情報×各種専門分野」に活かし、さらに充実させていく。**

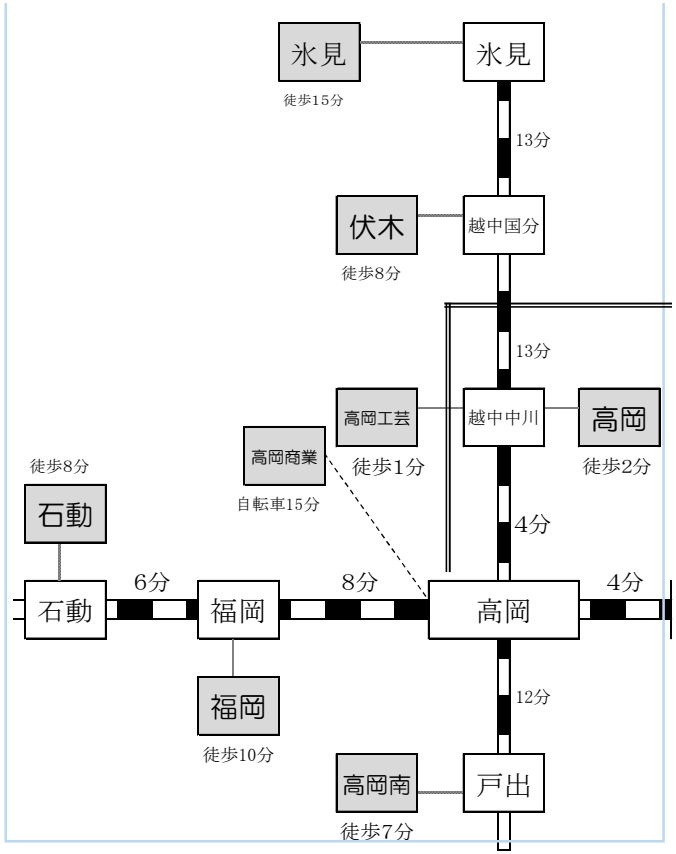
（４）高岡・氷見・小矢部エリア

①県立高校（全日制）の設置状況

高岡高校（普通科、探究科学科）	第２期校として活用
高岡工芸高校（工業科）	
高岡商業高校（商業科）	第１期校として活用
伏木高校（国際交流科）	
高岡南高校（普通科）	
福岡高校（普通科）	
氷見高校（普通科、農業科学科、海洋科学科、ビジネス科、生活福祉科）	市に１校
石動高校（普通科、商業科）	市に１校

②通学の便

高岡工芸高校	ＪＲ氷見線（越中中川駅から徒歩１分）
伏木高校	ＪＲ氷見線（越中国分駅から徒歩８分）
高岡南高校	ＪＲ城端線（戸出駅から徒歩７分）
福岡高校	あいの風富山鉄道（福岡駅から徒歩 10 分）



③教育内容

高岡南高校、福岡高校における国際教育や、伏木高校における環日本海諸国との経済・文化・学術等の交流は、第１期に設置するグローバルハイスクールや未来探求ハイスクール（タイプ１）の教育内容と共通する部分が多い。高岡工芸高校の教育内容は第１期校と共通する内容が少ない。

④志願状況（直近５年平均）、地元進学率（３年平均の比較 R3-R5⇒R6-R8）

伏木高校	国際交流科 0.55 倍	【参考】高岡市内中学校からの進学割合 伏木高校　4.8%⇒1.9% 高岡南高校　7.0%⇒6.9% 福岡高校　5.9%⇒6.0%
高岡南高校	普通科 1.12 倍	
福岡高校	普通科 1.10 倍	

こうした観点から検討し、伏木高校を令和 11 年度より募集停止とし、下記のとおり発展的に再構築する。

- **伏木高校で築き上げてきた教育実績や特色ある取組み、また現在行われている環日本海諸国との交流を高岡商業高校敷地に設置する未来探求ハイスクールに引き継ぐとともに、将来を見据えた新たな取組みを加え再構築する。**
- **併せて、国際理解に関する学習をグローバルハイスクールにおいても活かし、さらに充実させていく。**

資料４

「再構築ガイドライン」及び「第１期設置方針」に係る論点整理

・７月２２日の構想検討会議で取りまとめた「再構築ガイドライン」（案）及び「第１期設置方針」（案）に対し、様々な、貴重なご意見をいただきました。
・そうしたご意見を踏まえながら、「こどもまんなか」の視点で県立高校づくりを「実行段階」へと移していけるよう、いただいたご意見を、次のように整理しました。

区　　分		論　　点
１「再構築ガイドライン」に係るご意見	(1) 構想の方向性や考え方などへのご意見	①今後の学校規模（大規模校含む）、学校数などに関すること
	(2) 構想を具体的に進める際に考慮すべきご意見	②　第２期・第３期における地域共創ＨＳ、中高一貫教育校、大規模校などに関すること ③　県立高校の魅力化と情報発信に関すること
２「第１期設置方針」に係るご意見	(1) 第１期校の方向性や考え方などへのご意見	④　第１期校の教育内容などに関すること
	(2) 第１期校の「設置計画」を検討していく際に考慮すべきご意見	
	(3) 県立高校として使用しなくなる校舎・敷地に関するご意見	⑤　閉校とする学校に関すること

1　「再構築ガイドライン」に係るご意見

(1) 構想の方向性や考え方などへのご意見

論点	論点に関する主なご意見	考え方の整理（案）	
①学校規模、学校数	1　大規模校の開設は、学校配置全体のバランスや子どもたちの学びのニーズについて精査し、慎重にプロセスを進める必要がある。**「ガイドライン」「12 学級程度を目安」について、再検討する考えはないか。**（９月県議会　等）	・新時代ＨＳ構想は、人口減少が進む中においても、生徒に多様な選択肢を提供できるよう、大・中・小、様々な規模の特色ある学校をバランスよく配置するもの。大規模校も含め、全ての新時代ＨＳが魅力ある学校となるよう検討を進める。 ・「再構築ガイドライン」を、社会情勢の変化や今後の中学校卒業予定者数の状況などに応じて、必要な場合は見直しを行いつつ、構想を着実に推進するための「羅針盤」とする。	左記の考えは、実施方針及びガイドラインに記載済み 実施方針(p2) ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ （はじめに）
	2　今後の諸情勢の変化も予想されるため、**「20 校」「480 人」など将来をしばる数字の枠を固定しない**こと。（請願　等）		
	3　学校数を **20 に減らすのは減らし過ぎ**だと思うので、見直しをお願いしたい。（意見交換会　等）		
	4　大規模校の生徒が登校する場合の交通機関の受け皿について議論されていない。（パブリックコメント）		
	5　高校がなくなることによる地域社会への影響は大きい。仮に、**大規模校の定員を 320 人に減らせば、小規模校を１校残す**ことができる。（９月県議会　等）	・今後、**大規模校の整備構想**を検討していくにあたり、①中長期的な生徒数の見通しや生徒のニーズなどを踏まえ、②大規模校の設置による県全体の学校配置への影響や施設設備などの費用対効果を整理しながら、③大規模校の理念と意義をどのように実現していくか、また、そのために必要な**学校規模や整備方法はどうあるべきか**について、具体的な検討を進める。	**今後、大規模校の理念を踏まえ、さらに検討していくことをガイドラインに追記** （p11、p15）
	6　大規模校の設置で、富山市内の高校の数が減る。小規模校を含めて**現在の県立高校の施設整備費、少人数学級などの教員配置の充実を図ることが「こどもまんなか」**だ。（９月県議会）		
	7　生徒数が減少していく中、新たに大規模校を設置する必要があるのか。また、下新川地区や砺波地区から呉羽まで通学するのは大変。（意見交換会）		
	8　地域に根差した学校をつくるという意味では、私立高校も含め、どこの地域にも一定の学校が存在するということが大事ではないか。（意見交換会　等）		
	9　大規模校の教育効果を強調しているが、「ウェルビーイング」は、一部の生徒のものにしかならない。（パブリックコメント）		
	10　地域に学校を残さなくてはいけないという意見もあるが、今後、中学生が減少していく中で、ある程度学校数を減らすことは避けられない。**20 校に減らしても県民が納得できる教育を保障してもらえれば良い。**（意見交換会）		

論点	論点に関する主なご意見	考え方の整理（案）	
	11　**教職員や保護者、同窓会や地域の声をもっと聞き**、さらに議論を深める必要がある。（９月県議会　等）	・今般の県立高校の再構築にあたっては、令和３年度から、様々な立場の方々から多様な形で、丁寧にご意見をお聞きしてきた。 ・今回いただいたご意見は、①論点を整理し、ガイドライン及び設置方針の修正を検討するものと、②今後の構想の推進や学校づくりに活かすものに整理した。 ・今後、いただいたご意見も踏まえながら、学校現場の教員を含めた新たな学校づくりの検討体制を構築し、検討を加速していく。	―
	12　閉校の方針が示された高校については、関係者や地域の方々に丁寧に説明していくとのことだが、今後の限られた時間でどのように取り組んでいくのか。（９月県議会）		
	13　県立高校として使用しなくなる高校の地域に出かけ、地域の声を聞くべき。（意見交換会　等）		
	14　**現場の教職員の理解がない中でのトップダウンでは、よりよい教育は望めない**。学校、教育にもっと自由とゆとりが必要。（パブリックコメント）		

（2）構想を具体的に進める際に考慮すべきご意見

論点	論点に関する主なご意見	考え方の整理（案）	
②地域共創ＨＳ・中高一貫教育校・大規模校	1　第２期再構築（令和 15 年度）を待たず、小規模校だからこそできる**魅力ある「地域共創ＨＳ」づくりを、民間提案も募りながら県・地元自治体で先行して取り組む必要**がある。（９月県議会）	・県立高校の特色や魅力の向上に向け、国の採択を受けた**改革先導校での地元自治体等との連携や地元企業との連携学習の横展開、他県での取り組み例**なども含め、**どのような取組みが可能か、地元自治体のご意見も踏まえて検討**する。 ・現に定員割れが生じ、またそれが継続する学校については、毎年の学級編制の検討の中で、学級数・定員のほか、学科の見直しなど、構想の推進を基本とし、当該校に求められる教育について抜本的な対応を検討していく。	**各校における地域との連携活動を整理し、検討を進めていくことを、ガイドラインに追記（ｐ6）**
	2　来年度、県内３校で１学年２学級になるなど、小規模化が進んでおり、第２期・第３期の再編前に閉校せざるを得ない可能性もありうる。**第２期・第３期のスケジュールを前倒しするべき**ではないか。（９月県議会）		
	3　**中高一貫教育校は、どのような目的で設置し、どのような人材を育成**していくのか、また、既存の県立高校や地域の教育環境にどのような効果をもたらすのか。 ・中高一貫教育校は新たな施設整備を行う必要はあるのか。（９月県議会　等）	・**学力だけでなく、探究への意欲や思考力・表現力、協働する力などを育めるよう**、中・高校生の混合グループによる探究活動などで、幅広い年齢集団の中で多様な価値観に触れつつ、互いに教え、教わりながら、学びの楽しさを知り、なりたい自分を描くことができる学校を目指す。 ・**幅広い年齢集団での教育実践や、大学との学術的な連携などの成果や課題を、他の中学校や高校に共有し、様々な地域における学校連携の強化や学びの質の向上**につなげる。 ・今後、現場教員や関係機関なども交えた検討体制のもと、教育内容など具体化の議論を加速する。	**中高一貫教育校の設置目的や、今後、関係者と着実に検討していくことを、ガイドラインに追記（ｐ9、ｐ14）**
	4　選抜方法は今後とあるが、**中学校入学段階での入試競争が懸念**されるので、中高一貫校には反対。（意見交換会　等）		
	5　現在の探究科学科の募集停止や**中高一貫教育校の募集開始などのタイムスケジュールを示しながら、検討**を進めて欲しい。（意見交換会）		
	6　新たに設置予定の**大規模校は、生徒に選ばれ、行きたくなるハード・ソフト両面から魅力ある学校**とし、多様な学校行事や授業、先生・講師など他にはない県内唯一のワクワクする高校にしなければならない。（９月県議会　等）	・大規模校については、**多くの科目や部活動から選択できるようにしてほしいとの生徒や保護者等の期待に応えられるよう**、必要な施設を配置・整備するなど、多様な興味・関心を持った生徒が主体的に挑戦できる、魅力ある学校になるよう検討を進める。	**今後、大規模校の理念を踏まえ、さらに検討していくことをガイドラインに追記（ｐ11、ｐ15）**
	7　大規模校では、志望する大学の学習のために多様な科目から選択できる単位制になっているとよい。（意見交換会）		
	8　大規模校の個人に合わせた学校選択ができる仕組みに賛成だが、**少人数指導がしにくく、授業についていけない生徒が取り残される可能性が高くなる**のではないか。（パブリックコメント）		

論点	論点に関する主なご意見	考え方の整理（案）	
③県立高校の魅力化・情報発信	1　構想について高校生や保護者に**宣伝が足りていない**と感じる。 （パブリックコメント）	・引き続き、各学校の特色化・魅力化につとめるとともに、新たな学校の特色や魅力を、生徒や保護者の皆さんにわかりやすくお示ししていくことが大切であり、「この学校に行きたい」と思ってもらえるよう、**生徒や保護者、中学校教員等に対する情報発信の充実・強化について検討**する。	**構想の周知、県立高校の魅力発信を、ガイドラインに追記** **（ｐ14）**
	2　「得意を伸ばす」、「なりたい自分」というのはすべての学校に必要。**中学校の進路指導の先生としっかり連携**してほしい。 （意見交換会）		
	3　中学１・２年生対象のオープンハイスクールや高校再編についての説明会など、**中学生が進路を考える上で、高校の情報や特色を知ることができる機会を十分に設けて**欲しい。 （意見交換会　等）		
	4　どの高校に行けばどんな進路があるのか例示してもらえると、受検生は将来が想像できる。（意見交換会）		
	5　中学校の教職員や保護者の意識をリニューアルできるよう、タイムリーで分かりやすいＰＲや説明をお願いしたい。 （意見交換会）		
	6　**中学生や保護者への早期からの情報提供や内容の充実**など、情報発信の充実・強化が必要。（意見交換会　等）		

２　「第１期設置方針」に係るご意見

（1）第１期校の方向性や考え方などへのご意見及び（2）第１期校の「設置計画」を検討していく際に考慮すべきご意見

論点	論点に関する主なご意見	考え方の整理（案）	
④第１期校	1　**第１期のスタート（令和11年４月）まで、各校において、どのような体制で新しい学校づくりの準備を進めていくのか。**（９月県議会）	・今後、関係する高校の校長などを加え、高校ごとに、学科構成や教育内容、設置する部活動、必要な施設・設備など、具体の議論を加速し、学校の骨格づくりに向けた検討を進める。 ・各校に「開設準備室」を設置し、学校づくりの詳細を詰め、来年中を目途に「第１期設置計画」を取りまとめる。	今後の第１期「設置計画」の取りまとめや、学校名の検討の方向性について、ガイドラインに記載済み（ｐ14、15）
	2　グローバルＨＳについて、英語の授業数が多いだけでなく、**外国の文化を探究できる内容**が充実していると良い。（意見交換会　等）		
	3　グローバルＨＳについて、英語力や、探究活動への意欲・適応力には個人差があるので、１年生全員均一に英語学習や国際教育を提供するのでは、国際教育の密度が薄まる。　（パブリックコメント）		
	4　未来探求ＨＳは、どのように特色ある学校として打ち出し、中学生や保護者に選ばれる学校にしていくのか。　（９月県議会）		
	5　データサイエンスやＡＩを使いこなせるようになりたいので、このような学校は楽しみ。（意見交換会）		
	6　**「余白の時間」**を活用した個別最適の学習を進めるためには**生徒への適切なフォローが必要**。（意見交換会　等）		
	7　生徒に魅力ある高校づくりの一環として、県立高校の部活動環境の充実を図ってはどうか。（９月県議会　等）		
	8　**部活動に打ち込める環境と指導者の整備**など、特色ある部活動をできるようにして欲しい。（意見交換会　等）		
	9　新しい学校は、「小杉高校」ではなく「射水高校」としてはどうか。（意見交換会）	・「再構築ガイドライン」では、本県の県立高校の名称の特徴や変遷等を踏まえ、①所在する地域がわかること、②親しみやすく、分かりやすいことに留意しながら、「こどもまんなか」の視点で検討することとしている。	
	10　学校名は、少なくとも「滑川」の２文字は入れるべき。（意見交換会）		

(3) 県立高校として使用しなくなる校舎・敷地に関するご意見

論点	論点に関する主なご意見	考え方の整理（案）	
⑤閉校する学校	1　統合ではなく、閉校とした理由は何か。（意見交換会　等）	・自民党議員会教育ＰＴの提言などにおいて、「学校規模を基準とした高校の統合ではなく、生徒にどのような教育を提供するかが大事」とのご意見を多くいただいた。こうしたご意見を踏まえ、従来の学校規模を基準とした再編統合とは異なり、将来目指すべき県立高校の姿を描いた上で、そこから逆算的に各段階の姿を考える形で検討してきた。 ・**各校における教育実績を新時代ＨＳに引き継ぐとともに、将来を見据えた新たな取組みを加え再構築する。**	**各校におけるこれまでの教育実績の継承とさらなる発展について、ガイドライン及び設置方針に追記** ガイドライン(ｐ3) 設置方針 （ｐ2、ｐ14～16）
	2　今ある高校全てを「募集停止」とし閉校するのではなく、**これまで各高校が積み上げてきた歴史や教育を大事にして、必要な改革方向を示すべき**。（９月県議会）		
	3　**閉校後の学校文化等の継承**について記載がない。閉校対象校について、どのような事業を展開するのか具体的に示されるべき。**同窓会の取り扱い**についても、関係者の意見を聞きながら、丁寧に進めてもらいたい。（パブリックコメント　等）		
	4　閉校とは廃校ということ。廃校では、その学校の現在の教育活動を継承することが困難になる。（パブリックコメント）		
	5　なぜ、この学校が閉校となるのか。閉校方針を再検討してほしい。（意見交換会　要望書　等）	・「将来どのような高校が必要なのか」という視点で検討を進め、少子化が進む中においても、生徒に多様な選択肢を提供できるよう、全県的な視野に立ち、それぞれ特色ある新時代とやまハイスクールを県内にバランスよく配置することが、県の責務であると考えています。	―
	6　閉校するとされた３校の来年度以降の生徒募集への支援や、**学びの環境の維持・向上**が重要である。（９月県議会　等）	・今後、各校と県教育委員会が連携し、**学びの環境の維持・向上**につなげていく。このため、まずは来年度の学級編制において、第１期に閉校とする案とした高校は、教科ごとに必要な教員を配置してきめ細かな指導や多様な学習機会を確保できるよう、**学級数と募集定員を維持し、教員配置にも配慮**することとしている。	**閉校となる学校の学習環境に配慮することを、ガイドラインに追記** （ｐ15）
	7　閉校となる学校の学びを充実するといった記載がない。**教員の数も減らさず、充実した教育を受けることができるよう予算措置を**お願いしたい。（意見交換会）		
	8　中学生の子を持つ保護者として、今後**閉校していく学校へ進学する生徒への十分なフォロー**をお願いしたい。（意見交換会　等）		
	9　閉校を決定してから跡地活用を考えるのではなく、同時に、関係者や地域の方々が納得できるような跡地活用案やスケジュールを示してもらいたい。（９月県議会）	・今後、円滑に活用方策の検討を進められるよう、民間での活用や県有施設などの公的な施設としての活用も含め、庁内関係部局であらかじめ活用案を探る。 ・地域のニーズや住民の声、地方創生の観点等を勘案し、地元の市町村の意向を十分に考慮しながら、今後検討・協議する。	県立高校として使用しなくなる校舎・敷地の活用方法について、ガイドラインに記載済み （ｐ15）
	10　閉校となる校舎跡地の利活用について、今後**どのようなスケジュールや手法**で進めていくのか。（意見交換会）		
	11　閉校となる高校の跡地利用について、校舎は防災拠点であることなどから、可能な限り建物施設は存続させるべき。（パブリックコメント）		

資料５

高校教育改革実行計画の検討状況について

教育みらい室 高校教育充実強化担当

高等学校等教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）に係る本県の対応と今後の展開

国

高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）

～2040年に向けた「N-E.X.T.ハイスクール構想」～　策定（R8.2）

＜視点１＞不確実な時代を自立して生きていく主権者として、AIに代替されない能力や個性の伸長

＜視点２＞我が国や地域の経済・社会の発展を支える人材育成

＜視点３＞一人一人の多様な学習ニーズに対応した教育機会・アクセスの確保

中核となる施策

①**専門高校の機能強化・高度化**
（アドバンスト・エッセンシャルワーカーの育成など）

②**普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化**
（文理の双方の素養を有する人材の育成など）

③**地理的アクセス・多様な学びの確保**

改革先導拠点の創出（R7年度補正　2,950億円）

産業イノベーション人材育成等に資する高等学校等教育改革促進事業

（公募事業：１都道府県あたり４拠点・62億円が上限）

（各都道府県で実行計画策定）

高等学校教育改革交付金（仮称）（Ｒ9年度概算要求：事項要求）

各都道府県の取組みを財政支援

富山県

・**高等学校教育改革推進基金設置**（R7年度2月補正）

富山県高等学校等教育改革プロジェクト（採択額62億円）

【改革先導拠点（採択済）**】**

類型１　アドバンスト・エッセンシャルワーカー等育成支援
高岡工芸高校、富山商業高校

類型２　理数系人材育成支援
魚津高校

類型３　多様な学習ニーズに対応した教育機会の確保
小杉高校

（Ｒ８年度中に策定）

富山県高校教育改革実行計画

検討会設置（R8.8～）

・高校改革の実現に向けて中核となる３つの施策の展開

・教育課程の改革、生徒・保護者への周知

・進捗の管理と評価、推進体制　　等

（Ｒ８～10年度）
改革先導拠点での取組み展開

（R9年度～）　**実行計画に基づく改革の展開**
国交付金等を活用

富山県「高校教育改革実行計画」検討会

＜検討会のメンバー＞委員・特別委員20名
林誠一氏（座長、富山大学学長特命補佐・客員教授）、白井俊氏（東京科学大学理事・副学長）、
近藤裕世氏（県建設業協会GEプロジェクト委員長）、島田優平氏（県高等学校PTA連合会副会長）
ほか、教育・産業等の関係者、大学・大学院生、高校生　等

<スケジュール>

第１回（８月６日）　　総論・方向性

第２回（９月30日）　　普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化／地理的アクセス・多様な学びの確保

第３回（11月予定）　　専門高校の機能強化・高度化

11月　アンケート調査の実施
（対象：高校２年生、中学２年生、保護者、教員、企業）

第４回（12月予定）　　総括・高校教育改革実行計画案

（令和9年1月予定）　　パブリックコメント

（令和9年３月予定）　　総合教育会議
計画策定

富山県高校教育改革実行計画案の検討に向けて

中核となる３つの施策のポイント

- 教育現場に大きく踏み込んだ、産業界（企業）、大学、地域等との具体的な連携による実践的な学びの活動
- AIやデジタル技術の駆使（施設設備の高度化を含む）
- 生徒本位の横断的な取組み　学校や地域横断、分野横断（教育⇔他分野、教育内部（学校種等））
- 生徒、保護者、学校関係者等の意識改革、高校の取組みの共有・理解醸成

検討会での主な意見等

改革先導拠点の取組みの横展開

・企業等連携による実習、課題研究等の実践的な学びの展開
・探究の充実、３年次からの文理分け
・教育課程柔軟化、余白の時間、外部人材活用
・協力校等との学校間連携（オンライン等）

探究の充実

・十分な授業時間の確保、幅広いテーマ設定
・本県の行政課題を幅広く扱うカリキュラム
・探究を行う意義の生徒の理解促進
・生徒同士が、プロセスや成果を共有し、刺激を受け合い学びを深めていく機会

柔軟なカリキュラムと進路選択

・文理双方を学ぶことができる機会の確保、文理選択・系列選択の柔軟化
・オープンスクール、先輩に学ぶ会の充実
・生徒一人ひとりと丁寧に向き合うための時間の確保

地域・産業との協働

・長期的なインターンシップの拡充
・商業の枠組みを用いた地域の課題解決
・産業界からの講師の派遣など、産業連携型の取組みの推進
・地域や企業側のメリットの提示

多様な連携による教育体制の構築

・学校と地域・企業・大学をつなぐ仕掛けづくり、コーディネーター
・オンライン等での学校を超えた学び合い
・中学校、小学校との継続的な学びの連携
・生徒も参加する対話型の学校運営協議会

その他

・教員研修の充実、意識改革
・AIを取り入れた情報教育の拡充
・教育効果の長期的な評価
・中学校や保護者等への情報提供

（参考）

高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）【概要】
～2040年に向けた「N-E.X.T.（ネクスト）ハイスクール構想」～

New Education, New Excellence, New Transformation of High Schools

1. グランドデザインの背景・必要性

✓ AIの実装などデジタル技術の目まぐるしい発展
2040年には、少子高齢化、生産年齢人口の減少、地方の過疎化が一層深刻化
→現在の人材供給トレンドが続けば、労働力需給ギャップが発生
（事務職は余剰、AI・ロボット関係、いわゆる理系人材は不足）

✓ 将来を正確に予測することは難しく、どのような未来が訪れるか分からない
→生徒それぞれの多様な個性やニーズ、興味・関心に応じた学びを生かした自己実現を支え、生徒の可能性を広げ能力を伸ばす
→全ての高校生が家庭の経済状況等に左右されることなく、希望する大学等への進学や就職等をし、それが個人の幸福につながり、ひいては、我が国の経済・社会の基盤を強いものとしていくことにつながる



2. 高校改革の方向性～2040年に向けた高校の姿～

視点1 不確実な時代を自立して生きていく主権者として、AIに代替されない能力や個性の伸長

学びの在り方の転換（New Transformation）

✓ リアルとデジタルの良さを組み合わせつつ、「好き」を育み、「得意」を伸ばす機会を確保し、生徒の実態を踏まえた柔軟な教育課程の実現
✓ スクール・ミッション、スクール・ポリシーを踏まえた教育活動の改善、公表
✓ 高校教育と一貫した大学教育改革（主体的・自律的な学修のための環境構築、出口における質保証等）

視点2 我が国や地域の経済・社会の発展を支える人材育成

最先端を学ぶ高校の特色化・魅力化（New Excellence）

✓ 探究・文理横断・実践的な学び、STEAM教育、産業界と協働した専門高校の学びの充実
➡ 理数・文系的素養やAIを使いこなす力を身に付け、社会で活躍するロールモデルを体感

✓ 各高校の特色化・魅力化
➡ 学科構成の見直し、専門高校の機能強化・高度化、グローバル人材の育成
➡ 「普通科」の在り方の転換、即戦力の人材と進学を見据えた高度専門職人材の育成

視点3 一人一人の多様な学習ニーズに対応した教育機会・アクセスの確保

学ぶ機会・アクセスの確保（New Education）

✓ 全国どこにいても多様で質の高い学びを保障し、地方の生徒はもとより誰一人取り残されず、全ての生徒の可能性を最大限引き出す
（地理的アクセスの確保、都道府県の実情等に応じた学校配置・規模の適正化、小規模校を含む遠隔授業等の推進）
✓ 通信制高校の教育の質の確保・向上
✓ 不登校生徒への学習支援、特別支援教育や日本語指導が必要な生徒への教育の充実

3つの視点を重視しながら、更なる高校改革を進め、N-E.X.T.ハイスクール構想を実現する。
高校から大学・大学院に至るまでの一貫した改革により、強い経済や地域社会の基盤となる人材を育成する。

（文部科学省資料）

3. N-E.X.T.ハイスクール構想の中核となる高校支援

（参考）

国の
高校教育改革に関する
グランドデザイン策定

都道府県 実行計画策定

総合教育会議等を活用し、地域別就業構造の推計や人口の将来推計等を踏まえて検討。首長、関係部局、大学、地域の関係者や産業界との連携・協働を図る。

安定財源を確保した上で、
交付金等の新たな財政支援の
仕組みの構築

基金の執行状況等を踏まえ、R9年度予算の編成過程で検討。

※交付金等の構築に先立ち、高校教育改革のための基金を都道府県に造成し、N-E.X.T.ハイスクール構想の実現のために、パイロットケースとして先導的な学びの在り方を構築する高校（改革先導拠点）を創設。

新しい学校のイメージや取組例

専門高校の機能強化・高度化
（アドバンスト・エッセンシャルワーカーの育成等）

（学校のイメージ）
地域発のイノベーションを興すことのできる人材等の育成を目指し、理論と実践の往還によるカリキュラムの実施等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

（取組例）
- ✓ ビジネス経験の必修化
- ✓ ものづくりから流通まで一体的な学びの実践
- ✓ 「高校版企業寄附講座」等の実践やそれを前提とした進学・就職機会の確保

普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化
（文理の双方の素養を有する人材の育成等）

（学校のイメージ）
文理にとらわれない幅広い教養等を備えた新しい価値を創造する人材等の育成を目指し、実社会につながる生きた授業の実践等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

（取組例）
- ✓ 実社会につながる生きた授業の実践
- ✓ 高度実験環境を核とする理数探究拠点整備
- ✓ 探究型授業研修の充実による教師のスキル向上、探究伴走支援専門チームの構築

地理的アクセス・多様な学びの確保

（学校のイメージ）
学校の枠を超えて多様な人々と協働し、社会の課題を主体的に探究・解決できる人材等の育成を目指し、柔軟で質の高い学びの実践等に取り組み、必要な施設設備の高度化が図られた学校

（取組例）
- ✓ 学校間連携や遠隔授業等を活用した教育機会の確保
- ✓ 学校と地域の関係機関の連携・協働の強化による学習環境の提供
- ✓ 他の学校種との連携の充実

これらの取組の一環として、留学支援を含むグローバル人材育成支援や、学校と地域が連携・協働した学力向上・学習支援などについて取り組む。

2040年までに達成を目指す目標

【職業教育の高度化・魅力の強化関係】
・地域の産業界等と連携・協働した取組を行う専門高校：100%
・少子化傾向においても専門高校の生徒数を現在と同水準

【普通科の在り方の転換・魅力の強化関係】
・文理横断的な学びに取り組む普通科高校：100%
・普通科でいわゆる文系と理系の生徒の割合：同程度

【多様な学びの確保関係】
・学びの状況に関する生徒の肯定的な評価の向上
・高校卒業段階の進路未決定者の割合の半減

（文部科学省資料）

富山県「高校教育改革実行計画」策定体制

（参考）

（計画案の決定）　**総合教育会議**

（計画案の検討）　**富山県「高校教育改革実行計画」検討会**

魚津高等学校　２年生	井原木　李虹	（特別委員）
公立大学法人富山県立大学 情報システム工学科教授	岩本　健嗣	富山県AI統括責任者補佐
一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム　代表理事	岩本　悠	
富山県高等学校長協会　会長	亀谷　卓朗	高岡高等学校校長
富山県工業教育振興会　会長	川原　雅人	北陸電力㈱ 常務執行役員
呉羽高等学校　教諭	近郷　智絵	
魚津高等学校　２年生	草野　亮輔	（特別委員）
一般社団法人富山県建設業協会 ＧＥプロジェクト委員会　委員長	近藤　裕世	近藤建設㈱ 代表取締役社長
富山県高等学校PTA連合会　副会長	島田　優平	㈱島田木材 代表取締役社長
国立大学法人東京科学大学　理事・副学長	白井　俊	
一般社団法人富山県経営者協会 経営企画・IT委員会　委員	武内　香澄	武内プレス工業㈱ 常務取締役
一般社団法人富山県経営者協会 経営企画・IT委員会　委員	武内　香澄	武内プレス工業㈱ 常務取締役
富山経済同友会 教育を考える委員会　委員長	寺島　雅峰	㈱寺島コンサルタント 代表取締役社長
富山大学　経済学部　１年生	中林　華穂	学生団体Blue nexus代表
国立大学法人富山大学 学長特命補佐・客員教授	林　誠一	新時代とやまハイスクール 構想検討会議　副会長
大学コンソーシアム富山 大学コンソーシアム富山・高大連携事業担当	春名　亮	富山短期大学 経営情報学科　教授
富山県立大学院　情報工学研究科 情報システム工学専攻１年	藤井　結菜	富山県DX推進サポーター
㈱HIMIco-bridge　代表取締役	松木　佳太	
富山県中学校長会　副会長	松本　美和	氷見市立南部中学校校長
小杉高等学校　２年生	村田　伊亮	（特別委員）
小杉高等学校　２年生	森　理音	（特別委員）
地域教育改革リエゾン（富山県担当） （文化庁宗務課宗教法人行政室長）	西田　将史	オブザーバー

委員・特別委員　20名・オブザーバー　１名

（計画策定実務）　**ワーキンググループ**　県教育委員会・知事部局関係課

富山県高校教育改革実行計画の構成（予定）

（参考）

※文部科学省「高等学校教育改革実行計画」策定の手引き（令和８年５月）で示されている内容

1　計画の基本事項

・趣旨、位置づけ、期間、経緯（検討体制）
※既存の高校教育に関する計画や産業振興ビジョン等との内容の整合性や連携に留意
・計画期間は、３～５年程度

2　高校教育の現状と課題

・客観的なデータ（統計情報、アンケート・ヒアリング、これまで実施してきた高校改革の取組み・成果）
・地域別就業構造の推計、学科構成の状況、生徒数の減少に伴う影響、学校の適正規模・適正配置の課題等

3　高校改革の基本的な考え方と方向性

・基本理念、考え方、目指す高校の姿

4　高校改革の実現に向けて中核となる３つの施策等

・①専門高校の機能強化・高度化、②普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化、③地理的アクセス・多様な学びの確保

・改革先導拠点の取組み

5　その他の具体的施策

・教育課程の改革（単位制の柔軟化等）、学校の配置・規模の適正化、校務効率化、教員の働き方改革、人事配置・研修、入学者選抜の改善など

・生徒・保護者等県民への周知

6　計画の推進

・進捗の管理と評価（PDCA、継続的なモニタリング）、推進体制、数値目標、改革の工程表

令和８年度　教育大綱の参考指標に関する生徒の意識調査の結果

資料６

教育企画課
学術振興課

１　調査概要

（１）目　的

第３期富山県教育大綱（第４期富山県教育振興基本計画）（R8.3 策定)において設定した参考指標の現況値を把握するため

（２）対　象

高校３年生（県立高校、私立高校、県立特別支援学校）

（３）内　容

全国学力・学習状況調査において小学６年生、中学３年生を対象に行われている意識調査のうち、教育大綱の参考指標としている項目と同じ内容を調査

（４）時　期

令和８年４月 21 日～６月１日

（５）方　法

インターネット上の入力フォームから各自が回答

（６）回答率

81.0%　（回答者数 6257／在籍者数 7727）

＜参　考＞

・令和８年３月に新しい教育大綱（R8～12 年度）を策定。基本理念を「生涯にわたる学びを通して、県民一人ひとりのウェルビーイングを高める」とし、学校教育においては「楽しい学校」「行きたくなる学校」づくりを進め、子どもたち一人ひとりのウェルビーイングの向上を目指すこととした。
・教育大綱の「教育方針」及び「主な施策の方向性」において定めた「施策で目指す姿」がどの程度達成されたか、取組みの進捗状況を把握するための参考指標を設定した。
・指標は、県総合計画に倣い、従来のアウトプット的なものではなく、アウトカム的な要素を含み、大綱の基本理念に謳う「ウェルビーイング」が測れるものを中心に設定。その一部として全国学力･学習状況調査において小学６年生､中学３年生を対象に行われる意識調査５項目を採用した。
・当該調査が行われていない高校生に対しては同意識調査と同じ項目を県で新たに調査することとした。

２　調査結果

教育方針１　一人ひとりの可能性を引き出す質の高い教育の実現

主な施策の方向性（１）　子どもの才能や個性を伸ばす教育の推進

施策で目指す姿：子どもは、就学前から高等学校までの一貫した教育の中で、基礎的な学力を確実に定着させており、探求的な学習や専門的な学びを通じて、自分で考え、自ら取り組む力を身につけています。

指　　標	2024 年度の現況値	2030 年度の目標値	指標の考え方	目標設定の考え方
課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる児童生徒の割合 「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」に、当てはまる・どちらかといえば当てはまる、と回答した児童生徒の割合 （全国学力・学習状況調査、県教育委員会調査）	小学６年生： 80.5% 中学３年生： 78.7% 高校３年生： （新規調査）	小学６年生： 88%以上 中学３年生： 85%以上 高校３年生： （新規調査）	・　全国学力・学習調査の結果では、小・中学生の学力は全国平均を上回る水準を維持しているが、一方で課題の解決に向けて自分で考え取り組んだと答えた児童生徒の割合は全国平均を下回っており、学力を自主的、自発的な学びに結び付けることが課題。 ・　このため、主な施策の方向性（１）では、施策で目指す姿の１つとして「（子どもが）自分で考え、自ら取り組む力を身に付ける」ことを掲げた。 ・　これらを踏まえ、自分で考え、自ら取り組む力（主体性）を身につけていると答える児童生徒が、施策によりどの程度増加したのかを把握するために設定。 ・　この指標は新たな総合計画の成果指標（５年後の姿）にもなっている。	小中学生は、現況値から１割の増加を図り、全国平均を上回ることを目標とする。 〇全国平均 小学校６年生　81.9% 中学校３年生　80.3% 高校生については、継続調査しデータを蓄積・分析を行い、次期大綱で設定。

〇「施策」および「具体的な取組み」との関連

（抜粋）
（ア）就学前から小･中･高等学校への連続性を意識した主体的、対話的な学びや、少人数教育等を推進します。
〇「とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）」において「問題発見・解決能力」の育成を目指した授業　改善と学習習慣・生活習慣の定着に向けた取組みを実施します。
（イ）地域や企業、大学など実社会とのつながりを意識した探究的な学びや課題解決型学習（ＰＢＬ）を推進します。
〇グローバルな視点で課題を捉え、その解決策を実践する地域の担い手を育成するため、県立学校における海外での研修など探究型・課題解決型学習の実施を支援します。

■調査結果（最新３箇年）

No.1	2024	2025	2026	※2026 学校	分析など
小６	80.5 % （全国 81.9%）	78.5 % （全国 80.3%）	75.8 % （全国 77.6%）	79.7 % （全国 88.1%）	◇小学６年生は、全国同様、２年連続で割合が減少している。 ◇中学３年生は、全国同様、2025 年度に減少（75.5%）し、2026 年度に増加（76.8%）する結果となった。 ◇小中学生は３箇年とも全国平均を下回っている状況が続いている。 ◇高校３年生は、2026 年度の調査において、小中学生よりも高い結果となった。また、同じ学年集団の成長に伴う変化をみると、2023 年度の中学３年生（78.6%）→2026 年度の高校３年生(83.0%)と上昇している。（なお、小学６年生であった 2020 年度には同じ調査が行われていないため、比較できない。） ◇自分で考えて取り組むスキルが着実に身につくよう、小・中・高の各段階の連続性を意識した指導の充実に取り組むことが重要である。
中３	78.7 % （全国 80.3%）	75.5 % （全国 77.7%）	76.8 % （全国 78.8%）	85.1 % （全国 87.2%）	
高３	－	－	83.0 %	82.4 % 県立学校のみ	

※「2026 学校」の列は同趣旨の質問を学校に対して行ったもの。教職員が対象学年の児童・生徒をどのようにみているか管理職が回答した。

教育方針１　一人ひとりの可能性を引き出す質の高い教育の実現

主な施策の方向性（２）　様々な体験を通した社会で活きる力の育成

施策で目指す姿：子どもは、自己の在り方や生き方を探求し、学習と自己の将来とのつながりを見通しながら、主体的に進路を選択・決定できる能力と態度に加え、生涯にわたって自らのキャリアを発展させていく力を身につけています。

指　　標	2024 年度の現況値	2030 年度の目標値	指標の考え方	目標設定の考え方
将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合 「将来の夢や目標を持っていますか」に当てはまる・どちらかといえば当てはまる、と回答した児童生徒の割合 （全国学力・学習状況調査、県教育委員会調査）	小学６年生：81.0% 中学３年生：63.3% 高校３年生： （新規調査）	小学６年生：85%以上 中学３年生：73%以上 高校３年生： （新規調査）	・　学校段階が上がるにつれ、将来の夢や目標を持つ割合が低下する傾向があることが課題。 ・　このため、主な施策の方向性（２）では、施策で目指す姿の１つとして「子どもは、主体的に社会に参画する能力と態度に加え、生涯にわたって自らのキャリアを発展させていく力を身につけている」ことを掲げた。 ・　また、様々な体験を通して最終的に前向きな人生観や目的意識を持つことができたといえる児童生徒がどの程度増加したのかを把握するために設定。	小学生では既に全国平均（82.4%）と同程度の水準にあるため、この水準を維持し、さらに引き上げることを目標とする。 中学生では、夢や目標を持つ生徒の割合が、小学生の 81.0%から 63.3%へと約 18 ポイント減であることを課題として捉え、中学校段階での多様な社会体験活動等を充実することで、より多くの生徒が将来の夢や目標を持ち続けたり、新たな夢を見つけたりできることを目指す。

○「施策」および「具体的な取組み」との関連

（策定案抜粋）
（ア）地域社会の魅力や課題等に直接触れられる場や、自らの意見を表明し、意見交換をする機会を提供します。
○中学２年生が、規範意識や社会性を高め、将来の自分の生き方を考えるなど、生涯にわたってたくましく生き抜く力を身につけるために、地域での職場体験活動や福祉・ボランティア活動等に参加する「社会に学ぶ『14 歳の挑戦』」を実施します。
○「富山・金沢こどもサミット宣言」の趣旨に沿って、子どもたちが自らの取組みを発表し、その内容について互いに意見を表明し合ったり、意見交換を行ったりする機会を設けます。

■調査結果（最新３箇年）

No.2	2024	2025	2026	分析など
小６	81.0 % （全国 82.4% ）	83.0 % （全国 83.1% ）	81.3 % （全国 81.8% ）	◇小学６年生は、全国同様、2025 年度に上昇(83.0%)し、2026 年度に減少(81.3%)する結果となった。 ◇中学３年生は、全国とは動きが異なり、2025 年度に上昇(67.4%)し、2026 年度に減少(65.9%)する結果となった。 ◇小中学生は３箇年とも全国平均を下回っている状況が続いている。また、中学３年生は小学６年生よりも低い割合となっている。 ◇高校３年生は、2026 年度の調査において、中学３年生よりも高い結果となった。また、同じ学年集団の成長に伴う変化をみると、2023 年度の中学３年生（64.7%）→2026 年度の高校３年生(77.4%)と上昇した。 ◇自分のやりたいことや、将来像を明確に持てない児童生徒がいることから、小・中・高の各段階の教育活動を通して、社会の中で自分の役割や働くこと、夢をもつことの大切さについて理解を深め、将来の進路の選択、決定に導くことが重要である。
中３	63.3 % （全国 66.3% ）	67.4 % （全国 67.5% ）	65.9 % （全国 67.6% ）	
高３	－	－	77.4 %	

教育方針２　多様なニーズに対応したきめ細かな教育と支援の展開

主な施策の方向性（４）　誰一人取り残されない多様性と包摂性のある教育の推進

施策で目指す姿：子どもは、それぞれの状況に応じて校内で落ち着いて過ごすことができており、学校を楽しい場所、行きたい場所として感じています。

指　　標	2024 年度の現況値	2030 年度の目標値	指標の考え方	目標設定の考え方
学校に行くのは楽しいと思う児童生徒の割合 「学校に行くのは楽しいと思いますか」に、当てはまる・どちらかといえば当てはまる、と回答した児童生徒の割合 （全国学力・学習状況調査、県教育委員会調査）	小学６年生：84.9% 中学３年生：85.0% 高校３年生： （新規調査）	小学６年生：100% 中学３年生：100% 高校３年生： （新規調査）	・　全国学力・学習状況調査によると、普段の生活の中で幸せな気持ちになることがあると感じる小・中学生は 90%程度 ・　一方で、学校に行くのは楽しいと感じる児童生徒は 85%程度で、普段の生活で幸せな気持ちを感じていても、学校を楽しいと思っていない子どもたちがいる。 ・　また、子どもたちが学校生活を前向きに感じているか、子どもの主観的な幸福度を測るとともに、学校が楽しく安心して過ごせる場所であることは、不登校の未然防止のための重要な要素であるため、その状況を測るために設定。	それぞれの施策の統合的な成果として、すべての子どもにとって学校が心理的に安全で、自己肯定感を育むことができる場所となることを目指す。

○「施策」および「具体的な取組み」との関連

（策定案抜粋）
（ア）不登校など児童生徒の諸課題に対して、必要な支援を行います。
〇不登校の兆候がみられる児童生徒や不登校から学校復帰する段階にある児童生徒が校内で安心して学習や相談ができるよう、新たに校内教育支援センターを設置する市町村に対し、支援員の配置や施設設備の整備を行うために必要な経費の一部を補助します。
〇不登校など様々な困難を抱える児童生徒が、学校以外の居場所で安心して過ごせるよう、民間団体における取組みを支援します。
〇学校外の居場所としてフリースクールなど民間施設に通所する不登校児童生徒の家庭への支援を行います。
〇児童生徒が抱える悩みや不安に早期に寄り添うため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを効果的に配置・派遣し、教育相談体制の充実と教師への専門的な支援を行います。

■調査結果（最新３箇年）

No.3	2024	2025	2026	分析など
小６	84.9 % （全国 84.8% ）	86.2 % （全国 86.5% ）	85.0 % （全国 85.7% ）	◇小学６年生は、全国同様、2025 年度に上昇(86.2%)し、2026 年度に減少(85.0%)する結果となった。また、2025 年度、2026 年度は全国平均を下回る結果となった。 ◇中学３年生は、全国同様、2025 年度に上昇(86.8%)し、2026 年度に減少(85.6%)する結果となった。また、３箇年とも全国平均を上回っている。３箇年とも小学６年生よりもやや高くなっている。 ◇高校３年生は、2026 年度の調査において、小中学生よりも低い結果となっている。また、同じ学年集団の成長に伴う変化をみると、2023 年度の中学３年生（85.0%）→2026 年度の高校３年生(79.9%)と減少している。 ◇全国学力・学習状況調査によると、普段の生活の中で幸せな気持ちになることがあると感じる小中学生の割合は 90%程度(2026 年度)と、依然として本調査結果とのギャップがある。児童生徒が自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を構築し、有意義で充実した学校生活を送る中で自己実現を図っていけるよう、一人ひとりの学びや成長に寄り添い、指導の充実を図ることが必要である。
中３	85.0 % （全国 83.8% ）	86.8 % （全国 86.1% ）	85.6 % （全国 85.4% ）	
高３	－	－	79.9 %	

教育方針２　多様なニーズに対応したきめ細かな教育と支援の展開

主な施策の方向性（５）学校・家庭・地域で取り組む子どもの健やかな成長の支援

施策で目指す姿：教師は、生徒指導や教育相談に関する専門性を高め、いじめの未然防止・早期発見に努め、組織的に対応しています。

指　　標	2024 年度の現況値	2030 年度の目標値	指標の考え方	目標設定の考え方
困りごとや不安がある時に、学校で大人に相談できる児童生徒の割合 「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」に、当てはまる・どちらかといえば当てはまる、と回答した児童生徒の割合（全国学力・学習状況調査、県教育委員会調査）	小学６年生：68.4% 中学３年生：68.2% 高校３年生：（新規調査）	100%	・　３割以上の児童生徒が、困りごとや不安があっても学校で大人に相談できていないことが課題。 ・　このため、主な施策の方向性（５）では、施策で目指す姿の１つとして「(教師は、) 生徒指導や教育相談に関する専門性を高め、いじめの未然防止・早期発見に努める」ことを掲げた。 ・　これらを踏まえ、子どもが困難に直面したときに、一人で抱え込まずにＳＯＳを発信できる環境が学校にあるかを、子どもの視点から測るために設定。	学校がすべての子どもにとってのセーフティネットとなることを目指す。

○「施策」および「具体的な取組み」との関連

（策定案抜粋）
（ア）いじめやインターネット上のトラブルなど子どもたちを取り巻く喫緊の課題に対し、未然防止、早期発見・早期対応を徹底するための体制を強化します。
〇関係機関と連携し、いじめの未然防止に取り組むためのいじめ問題対策連絡会議を開催します。
〇いじめの問題に対する支援策を検討したりいじめ重大事態に対応したりするいじめ防止対策推進委員会を設置します。
（イ）教師の生徒指導の資質能力の向上と、学校現場を支える指導体制を整備します。
〇相談体制の充実と生活指導主事（相談担当）等の資質能力の向上を図るため、大学教員等をスーパーバイザーとして招き、指導・助言を受けながら適切な支援の在り方を検討するカウンセリングリーダー研修会を実施します。

■調査結果（最新３箇年）

No.4	2024	2025	2026	分析など
小６	68.4 %（全国 67.1% ）	72.6 %（全国 70.6% ）	70.8 %（全国 70.6% ）	◇小学６年生は、全国とは動きが異なり、2025 年度に上昇(72.6%)したが、2026 年度は減少(70.8%)している。また、３箇年とも全国平均を上回る結果となった。 ◇中学３年生は、全国同様、2025 年度に上昇(73.7%)し、2026 年度に減少(72.8%)する結果となった。また、３箇年とも全国平均を上回っている。2025 年度、2026 年度は小学６年生よりも高い結果となっている。 ◇高校３年生は、2026 年度の調査において、小中学生よりも高い結果となっている。また、同じ学年集団の成長に伴う変化をみると、2023 年度の中学３年生（68.9%）→2026 年度の高校３年生(74.8%)と増加している。 ◇小、中、高と成長するにしたがって周囲の大人と一定の関係性を築き、相談できる生徒が増えてくると考えられる一方で、依然として約３割の児童生徒が、困りごとや不安があっても学校で大人に相談できていないと考えられることから、引き続き各段階において、相談しやすい雰囲気づくりやＳＯＳ発信力向上の取組みをさらに進めていくことが必要である。
中３	68.2 %（全国 67.5% ）	73.7 %（全国 73.2% ）	72.8 %（全国 71.9% ）	
高３	－	－	74.8 %	

教育方針２　多様なニーズに対応したきめ細かな教育と支援の展開

主な施策の方向性（５）学校・家庭・地域で取り組む子どもの健やかな成長の支援

施策で目指す姿：子どもは、充実した読書環境の中で、自主的に本に親しみ、読書の楽しさを知ることで、豊かな感性や思考力、想像力を育んでいます。

指　　標	2024 年度の現況値	2030 年度の目標値	指標の考え方	目標設定の考え方
家や図書館で１日 10 分以上読書する児童生徒の割合 「学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」に 10 分以上と回答した児童生徒の割合 （全国学力・学習状況調査）	（2023 年度調査） 小学６年生 62.7% 中学３年生 44.6%	小学６年生： 70% 中学３年生： 50%	・　読書の習慣は、子どもの豊かな感性や思考力、想像力を育む。 ・　学校の授業以外の時間に、家庭や図書館で自主的に読書する習慣が定着していることが求められる。 ・　主な施策の方向性（５）では、施策で目指す姿の１つとして「（子どもは、）本に親しみ、豊かな感性や思考力、想像力を育んでいる」ことを掲げた。 ・　このことを踏まえ、子どもの豊かな感性や思考力、想像力を育む読書が、生活の一部としてどれだけ定着しているかを測るために設定し、施策による環境整備や意識啓発の効果を確認する。	小学生では既に全国平均以上の水準にあり、さらに上積みとして１割程度の増加を目標とする。 中学生では全国平均に達しておらず、全国平均と同水準を目指す。 ○全国平均(2023 年度) 小学校６年生　60.0% 中学校３年生　49.4%

○「施策」および「具体的な取組み」との関連

（策定案抜粋）
（ア）子どもの自主的な読書活動を推進するとともに、家庭・地域との連携や学校図書館の機能充実などを図り、誰もが本に親しめる読書環境の整備を推進します。
　○子どもたちが自主的に読書活動を行うことができるよう、家庭・地域・学校等の連携を深め、積極的にそのための環境整備を推進します。

■調査結果（最新３箇年 ※）　※2024 はこの質問項目がなかったため 2023 データを掲載

No.5	2023 ※	2025	2026	分析など
小６	62.7 % （全国 60.0% ）	55.1 % （全国 53.2% ）	45.9 % （全国 46.1% ）	◇小学６年生は、全国同様、２年連続で割合が大きく減少している。また、2025 年度まで全国平均を上回っていたが、2026 年度は全国平均を下回る結果(45.9%)となった。 ◇中学３年生は、全国同様、２年連続で割合が大きく減少している。また、３箇年とも全国平均を下回っている状況が続いている。 ◇高校３年生は、2026 年度の調査において、43.3%と中学生よりも高い結果となった。また、同じ学年集団の成長に伴う変化をみると、2023 年度の中学３年生（44.6%）→2026 年度の高校３年生(43.3%)と減少しているが、読書の習慣が生活の一部としてある程度定着しているため、減少幅が小さいことが考えられる。 ◇児童生徒のデジタル機器の利用増や幼少期から読書に親しむ機会が不足していることが要因の一つと考えられる。家庭・地域・学校の連携を深め、本に親しむ環境の整備・充実への取組みをさらに進めていくことが必要である。
中３	44.6 % （全国 49.4% ）	36.3 % （全国 40.4% ）	28.5 % （全国 33.6% ）	
高３	－	－	43.3 %	

３　調査結果一覧（2026 年）　No.6～11 は教育大綱の参考指標以外のもの

No.	質問		高３
1	（再掲）　課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる児童生徒の割合		生徒 83.0 ％　学校 82.4 ％
2	（再掲）　将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合		77.4 ％
3	（再掲）　学校に行くのは楽しいと思う児童生徒の割合		79.9 ％
4	（再掲）　困りごとや不安がある時に、学校で大人に相談できる児童生徒の割合		74.8 ％
5	（再掲）　家や図書館で１日 10 分以上読書する児童生徒の割合		43.3 ％
6	学習活動などの学校生活において、主体的にタブレット端末を活用していますか		69.4 ％
7	学習の中で PC・タブレットなどの ICT 機器を活用することをどのように感じていますか （当てはまるものを複数選択）	①自分のペースで理解しながら学習を進めることができる	35.8 ％
		②分からないことがあった時に、すぐ調べることができる	74.9 ％
		③楽しみながら学習を進めることができる	22.7 ％
		④画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる	23.7 ％
		⑤自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる	9.0 ％
		⑥友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる	14.4 ％
8	在籍している学校に入学してから、学校での学びを通じて自分は成長したと感じられている		89.8 ％
9	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う		87.7 ％
10	普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがある		86.8 ％
11	自分には、よいところがあると思う		81.0 ％